

平成29年(西暦2017年)06月

瞑想録(その20)

滝沢 無縛(たきざわ むばく)

この一連の瞑想録の主題は、「素朴な疑問と意外な気づき」です。誰もが当たり前だと思っていることを懷疑しおよそ人が気付かないことに気づこうという、自己流哲学の瞑想集です。ちなみにこれは科学でも学問でもありません。強いて分類すれば随筆です。科学が万能だとも思っていませんし、科学でない最大のポイントはここにあまたの思い付きについて証明を一切していないことです。私は、世の中には実は現状よりもずっと面白くて自由な物があるはずで、現代人はまだ十分にその視野を広げていないと信じています。

なお内容は気づいた順に並んでいるので、一見ランダムで読みにくいかもしれません。またこの論集の一連は下記のサイトに全部収容してあります。

<http://www.geocities.co.jp/bimromav13/>

<https://sites.google.com/site/mubaku133/>

さらにこの一連の論集は下記のブログの主要記事を集めたものです。

<http://blogs.yahoo.co.jp/oseh13>

2017. 05. 04

1、夢と解釈(その11)

<夢1>私は国際会議に参加して終了後に、知り合いの外人家族と温泉でくつろいでいた。すると外でかすかにジープの音がする。そのユダヤ人の父がすぐに立ち上がって外を見るや、「ユダヤ人狩りだ」と叫んだ。どうも時代は大戦前で、ナチが暗躍していたころらしい。彼が「日本人も危ない、全員隠れろ」と言うので、全員で押し入れに隠れた。しかし赤ん坊が泣きだしている。

<解釈1>微妙に最近行った耳鼻科医院で、赤ん坊が治療を嫌がって泣き叫んでいるところとダブっていました。

<夢2>私は印刷会社の社員で、お客様に提案する案内状をデザインした。そしてそれを依頼主の銀行に持っていくと、「ダメだ、違う、そもそもどうして設計会議もしていないで勝手に作ってしまうのだ、それは大手会社の仕事の仕方ではない」と頭ごなしに叱られた。大手会社には「打ち合わせを何回もやりつつ徐々に仕上げていく」と言う

瞑想録(その20)

不文律があるとのことだ。「時間の無駄過ぎませんか」とお伺いを立てると、「もういい、返れ」と仕事をなくしてしまった。

＜解釈2＞まあ大会社は貴族様たちで、所詮はお役所仕事ですよ。東京都の豊洲市場の役人仕事問題と、最近読んだホリエモンの「何でもすぐに決めちゃう」仕事ぶりの対照性が、心に残っていたように思います。

＜夢3＞中国人の友人のところに久しぶりに遊びに行ったら、とても懐かしがってくれた。そして「とっておきの場所を特別に紹介する」と言う。行ってみるとそれは「おかゆ専門店」だった。「おかゆは病人食だと思われがちですが、実は健康な人にも理想的な食事なのです」と、さも親友にしか教えない特別の秘密のように言う。最初の数回は付き合っただけで、さすがに3食おかゆだと飽きてきて文句を言った。するとその中国人の態度が豹変した。

＜解釈3＞「自信を持っているバカが一番度し難い」、こういう迷惑な経験は誰でもあるのではないのでしょうか。

＜夢4＞私は中学生で、学校の合唱クラブの団員だった。そして団員の中に一人、目の不自由な子がいた。当然ながら舞台への上がり下がりとか、自分ひとりではできない。先生が私に「その子に肩を貸しなさい」と指示した。その子は当然のように、年がら年中私の肩につかまっている。私はそもそも好きで合唱部をやっている訳でもなければ、人の世話も嫌いだ。だからいい加減面倒になって、その子の手を振り払った。すると先生が目を吊り上げて怒り、「お前は愛情のない欠陥人間だ、通知表に落第点をつけるぞ」とすごんだ。

＜解釈4＞私は人間関係の板挟みが大嫌いです。世界一面倒な上に不毛だと思います。

＜夢5＞横浜駅の裏路地のサブカル街にある、古民家を移築したような暗めの店に入った。店の中は例えばラテン語の聖書のような、およそ売れなくてかさばるような「商品」ばかりだった。ところが私はたまたまヘブライ語の数秘学の本を見つけたので、速攻で購入した。次の部屋に行くと、TVアニメの「銀魂」(ぎんたま)に出てくる「出雲」(いずも)と言う名の妖怪バカ侍キャラの似顔絵が大きく張り出してある。横にはTVがあってその動画も流していた。店員に「最近出雲の露出度が上がっていますね」と聞くと、「そうなのですよ、もう銀魂よりこっちの方が主役です」と言う。すると突然電気が消えて店が真っ暗になった。午後5時になったので店じまいだという。店員さん、領収書を頂戴よ。

瞑想録(その20)

＜解説5＞このサブカル通り、実在しないのですが夢には良く出てきます。なお、銀魂に「出雲」と言うキャラは居ません。おそらく最近就役した護衛艦「いずも」が、印象に残っていたのでしょう。

＜夢6＞嫁様に勧められたヘアサロンに行ってみたが、オーナーが代わっていてちっとも始めてくれない。私はしびれを切らして帰り、嫁様に事情を告げて文句を言った。すると私の家になぜか、九州の親戚が居る。車で来たと言っているが、一体どうやってたどり着いたのだろう。夢はそのまま、フェリー船上で海を見つめている自分の場面に変わった。

＜解説6＞無意味に待たされてイライラする夢はよく見ます。また深く青い海を怖いほど上から見る夢もよく見ます。親戚付き合いは大嫌いです。なお九州に親せきは居ません。

＜夢7＞草ぼうぼうの山道を必死にかけ分けて登るとそこには洞穴があり、何人かの僧侶が呪文を唱えて修行をしていた。間もなく修業が終わると僧侶たちはそれぞれが、「宝塔に仏舎利を納めに行く」と言って立ち上がって出ていく。ある僧は谷の方へ、別の僧は山の方へ、さらに別の僧は山の反対側へと行った具合だ。どうもそれぞれ宗派が違うようだ。私は山に登る僧について行ったが途中でボルダリングに失敗して、落ちて死にそうになる。

＜解釈7＞チベットの話を読んだ後なので、そのイメージが残っていたのだと思います。

＜夢8＞会議室で取引先との打ち合わせが終わった。すると相手方のマネージャーが手もみをしながらやってきて、「もう少しお付き合いください」と言う。そうして部屋中に幕が張られて即席の調理台ができ、そこでプロ職人たちが焼き鳥や刺身の盛り合わせなどを調理し始めた。銀座の有名料亭が始めた「出張宴会サービス」だという。結構豪勢な食べ物が山ほど出て、同僚たちは「飲めや歌え」のドンチャン騒ぎをしていた。だが私は、これが過剰接待にならないのかと心配になってきた。

＜解釈8＞世の中特にサラリーマンは、小心なくらいで何とか最後まで行けるものです。他方で「役得でせこく稼ごう」と言うのもサラリーマン根性です。

＜夢9＞家族で山道を登っていた。そのうちにモヤがかかり始めて、家族とはぐれてしまった。いくら探しても見つからない。そうこうしていると遊んでいる子供たちの集団に会ったので、家族を知らないか聞いてみた。するとそのうちの一人が牛乳瓶をあたかも水晶玉やレンズのようにかざして、しばらくして「あっちの方角です」と言う。言われたとおりに行ってみるとそこにちょっとした集落があり、私の家族もそこに居た。

瞑想録(その20)

＜解釈9＞家族とはぐれる夢はなぜかよく見ます。また坂道でモヤがかかるシーンも良く見ます。なぜでしょうね。

2、スミス均衡

経済学によくある素朴な疑問に、「どうしてキャバクラ嬢の方が看護婦より高給なのですか」と言う問いがある。全くこの世に正義や善意はないのかとも思う。答えから言えば、経済学は正義の為にあるわけではない。

今から350年も前に同様のことを考えたのが、「近代経済学の父」と呼ばれたアダム・スミスだ。彼は「人にとって必須でこれがないと生きていけないほど重要な空気がなぜタダなのか」を真剣に悩んだ結果、「モノの値段はあともう1単位得るのにどれだけ手間がかかるのか」であると看破した。

スミスのこの気づきは後に「限界効用説」として定式されたが、この定式化で分かるように、ミクロ経済とは基本的に微分学である。スミスのもう一つの気づきに「見えざる神の手」があるが、これは確率統計学における大数の法則である。スミス自身はむしろ倫理学の教授であった。

このスミスに源流を持つ自律的均衡をここでは、「スミス均衡」と呼ぼう。これは18世紀に定式化されたが、これに改良を加えたのが「ナッシュ均衡」で20世紀半ばのことである。これはスミス均衡の上に、「プレイヤーが独立でない場合」を考慮に入れたものである。

ただ最近の実体経済を見ていると、スミス均衡にしてもナッシュ均衡にしても、いずれもプロテスタント的な「プレイヤーは功利的であり良心的かつ理性的である」と言う無言の仮定が置かれているように思う。プレイヤーはわざわざ要らないものや割高な物は買わないという前提だ。

しかし最近の株式相場や20年前のバブル期等における、気分やうわさや憶測に大きく左右される大衆心理が主役の品のない経済の潮流を見ていると、もはやスミス均衡の基礎理念は死んだのではないかと思われてならない。そもそもマクロな道徳の守護神でないスミス均衡すら死んでいるのなら、割高の権化であり反道徳的なキャバ嬢の高給も当然であろう。

瞑想録(その20)

ところでミクロ的にはこのように需給の均衡で取引される価値の総体である富、あるいはその裏書である貨幣、これらは新たな富の創成がなくても自然界あるいは社会資本の奪取を大元に恒久的に回り続ける。つまりツイッターの会員数が伸びなくても、本来の原則通りなら現状維持で会社は回り続けるはずである。

そうなのであるがそこにもし新たな富の創成があれば、経済は右肩上がりに好循環することになる。そして経済の好循環のためにはその創成された富が第一義的にはその創成者に帰属するようにしないと励みがない。そしてほかの経済システムは別として、自由主義経済はこれを保証している。この保証が自由主義経済の活力の源泉である。

新たな富とは典型的には技術開発であるが、茶器や名画のような芸術もいやあらゆる創造行為が、少なくとも結果的には何らかの富の創成になっている。実際人々は自家用車のためなら金を出し、戦国大名も領土だけでなく名器をもらうことで手柄の評価になった。

そして経済と善行は無関係であるから、パチンコやカジノや麻雀のようなギャンブルの発明あるいは最近で言えば新しいスマホゲームのリリースも、それをやることにより損をする人が居ようがマスターベーション程度の時間つぶしであろうが、やはり富の創成である。

もちろん富は、その同じ人がパチンコで時間をつぶす代わりにソフトの1本でも作ってくれた方が、よほどありがたい。その意味でギャンブルやゲームは総体として富の増加に寄与しているのかあるいは食いつぶしているのか、悩ましい場合もある。

特に人の本質は、スミス均衡の前提であるプロテスタント的な「質素で禁欲」でもなければ、富を増やすために製造されたロボット部品でもない。あるいは共産主義では人はロボットや歯車かもしれないが、自由主義の下では人はもっと生々しい。つまりエピクロスも言ったように、人は楽しむために生まれてきたのであって労苦は人の本来属性ではない。

楽しいという心の喜びの境地や程度は数字で表せないので経済学には乗りにくい。が、快楽は倫理的には富と同レベルにその価値を主張できる。なおここで快楽は一般に肉体的ではなく人格的頭腦的なものである。この観点からは現代の「新勤勉主義」は、経済的富という数字に表せて効率を計量できる「善」の方に偏りすぎである。

瞑想録(その20)

だからであろうか、今の人々は快樂のための散財の仕方が下手で、強欲な儲け主義のおだてに乗せられている感がある。そもそも近年は収入が勤労の結果よりも、相場等での偶然的勝ち越しと言った不労所得に依っていることもあって、あぶく銭が入るとすぐに、バカ高い仲居だらけの温泉旅館に行ったりとか海外ツアーとか海洋クルーズに参加したりとか、明らかにつまらないところにつぎ込んで楽しんだ気になってしまう。

この「不労所得が勤労所得よりも高い」状態、これは例示すれば「日々寝そべっていても遺産相続の時だけ強欲に顰蹙(ひんしゅく)を買う程にもぎ取っていく方がよほど賢い」みたいなスミス均衡以上の悪徳を奨励する。あるいは東芝のように、「いくら地味に技術開発しても1本の契約で根こそぎ持っていかれる」と言うようなものだ。ここまで行くと反社会的に過ぎていて、自由主義経済は本当に存在価値があるかと疑問に思えてくる。

ただ他方でこの必須の衣食住を超えた「人として楽しみ」の世界、これがそもそもかなり酔狂で他人の趣味はおおよそ理解不能なほどだ。①外国からわざわざ飛行機に乗ってまで単なる野良猫のタマ駅長を見に来たりとか、②たまたま工事の結果で3人分しか立ち位置が無くなった「日本一狭い駅の立ち食いそば屋」をわざわざ特急に乗って食べに行ったりとかする。

③川越シェフの店で1杯700円のお通しの水を喜んで飲む人も居て、まあその道の同好でないと分からないものが多い。明らかにスミス均衡の前提はすでに死んでいる。だがこれらの酔狂を一言で無駄と片付けてしまうと、これは「過ぎたロボット功利主義」になってしまう。どれだけ遊ぶ余裕があるかで、新文明の高さは計られるべきなのだ。

今見たようにこれらの趣味や気晴らしには最低額とか最大効用と言う視点はない。仮に富の面だけを見ても、むしろ一見不条理な富の消費をしている。そしてこれら趣味に係る経済原理、これは今列挙したおおよそ酔狂な例を見ても分かるようにスミス均衡とは明らかに異なる原理で作動している。現場ではこの「新原理」に悪乗りして生き残っている会社すら多数あるのだ。

いずれにしても人類はそろそろ、現状の経済学をはじめとした「目先の数値信仰」から抜け出す時にきている。「快樂の活性度評価と経済学」を建設すべき時が来ているのではないか。

3、遠山の金さんと冬のソナタ

瞑想録(その20)

ここ最近、特に暇な中年のおばさんを中心に「韓流ブーム」がある。火付け役はパチンコにもなった著名番組の「冬のソナタ」だ。今やツタヤに行くと日本製の番組や映画のDVDは片隅に追いやられていて、一番良い場所を韓流物に取られている程だ。

私はおばさんでも暇でもないのに、韓流はあまり見ない。だが知るところによると、韓流には韓流の一定のステロタイプがある。「恋人同士が結婚しようと思ったところ親戚から『お前たちは兄妹だ』と注意されたのであきらめて別の人と結婚したら実はこれが悪意の嘘だった」とかだ。

「苦難の末にやっと会えたと思ったら白血病の末期だったが死ぬところを親が名乗り出て骨髄移植で奇跡的に助かった」と言うようなパターンもある。要するに確率的に極めて低い事象の二重三重の曇天返しである。「こんな明白な作り話に感動を繰り返す韓国人の脳構造は一体どれほど非理性的なのだろう」と、あきれ返って居た。

ところが良く考えてみると、日本の国民的長寿番組はもっとあり得ない。例えば「遠山の金さん捕り物帳」は、実は江戸町奉行(都知事兼裁判長)の遠山金四郎様が「町人金の字」として、「事件の一部始終を目撃していた」と言う設定だ。

しかも似たような設定は遠山の金さんだけでなく、「水戸黄門漫遊記」とか「暴れん坊将軍」とか沢山ある。私を含め多くの日本人が、このシリーズに感涙している。だがこんなことは韓流よりもっとあり得ない、荒唐無稽の極みではないか。だとしたら我々日本人は韓国人を、決してバカにできないことになる。これはむしろほとんど病気だ。

ここで私はしばし、日本人は本当に韓国人より病気なのかを真剣に瞑想してみた。その結果分かったことは、①「偉い人が目撃していた」は序であって日本人が感涙するのはその後の「身分の低い町人等への寛大な裁き」の方である、②番組構成全体に抑えが効いていて秩序と品がある一方で品のない大げさな多重曇天返しはない、の2点である。

遠山の金さんを例に取る。本当の悪人に厳しい裁きをした後に巻き込まれた町人の若夫婦に、「仕方ないとはいえ悪事に加担したことは許しがたい、よって江戸処払いを命ずる、どこかの田舎で終生仲睦まじく暮らすが良いぞ」と諭すと言った感じである。ここの部分に深い愛情こそあれ、浅薄な曇天返しなどない。

これらの例に留まらず、もう一点指摘したい。日本物には例えば「赤穂義士伝」のような忠義物が非常に多いのだが、韓流で忠義物はおよそ聞いたことがない。これには

瞑想録(その20)

歴史的背景がある。朝鮮は中国の万年属国であり、君主と言っても中国皇帝の顔色を窺ういわゆるヒラメ社員あるいは小心者の中間管理職なのだ。

だから「君主が民の為に善政を敷く」などと言うことは、朝鮮人の小作人根性にはおよそ概念出来ない。現に「遠山の金さん」は思いつきもしなかったし、今現在でも韓国では流行っていない。所詮は国民情緒法が憲法の上位にある国なのだ。朴前大統領に対する手の平を返すが如き態度も、「強い者を助けて弱い者をくじく」国民性の忠実な反映だ。

朝鮮とはひたすらに、諜報と謀略で生き延びてきた民族であり国である。しばしば「策士が策に溺れる」と言うような、考えすぎの独り相撲すらあった。例えば秀吉の遠征の時に、朝鮮は小西行長から加藤清正の上陸情報を入手していたにもかかわらず、勝手にガセネタだと判断して清正を無抵抗に上陸させてしまった。この手の諜報と謀略の国民性は冒頭に挙げた韓流ドラマの、「自分が考えすぎてあるいは裏切りであるいは判断ミスで『不要な不幸』に陥る」道筋と同じではないか。

ではそうだとすると、どうして最近になって日本でも韓流が流行り始めたのか。韓流の大げさで大味の繊細さのない筋立ては、日本古来の控えめな文化とはかなり異質なはずだ。まあ異質ではあるが一定の面白さはあるので、暇なおばさんたちの時間つぶしには手ごろなのであろう。だがこれが日本文化に根付いていない証拠に、韓流を真似した日本製ドラマは全く見られない。おばさんたちに受ける大きな理由に「主役がイケメン」という点もあるが、韓国は実は整形天国である。

それにしてもここまで流行ると韓国人が、「我々は文化でも日本を征服した」などと言って来そうだ。キムチの場合は日本に定着しており、今やその生産高は納豆を超えると言う。もっともこれで立場が逆ならば、「キムチは盛岡が原産で韓国のキムチはパクリだ」などと言いそうだ。だが日本人はそういうことは言わない。日本文化は余裕があり柔軟なために、海外産でも良いものは取り入れる。この精神で明治維新を成功させ、わずか27年後には日清戦争で勝利を挙げるほどだった。そしてこの恕の心について、韓国をも仲間外れにしないと言うことだ。

だから「日本人はどうして韓流的な大げさなパターンを思いつけなかったのか」と問われれば、次のような答えになる。江戸文学にはそういうのもあったが、あまりに抑えや品がなさ過ぎて結局流行らなかった。強いて言えば漫画の「サザエさん」が、「徹底的にバカ庶民で余りに下品すぎる」という意味で一番似ている。

まあ逆に言えば「似ていてあの程度」なのだ。「サザエ」は少なくとも現実的結果的には、愚民政策の先兵を担っている番組である。さらに映画やTV以外の「文学や絵画等において韓国の影響があるか」と聞かれれば、これもまた全く見えない。きわめて皮相的である。

と言う訳で日本のTV業界における韓流ブーム、おそらく一時もしたら、特に共働きが当たり前になって暇なおばさん族が消滅したら、「ともに消滅する」と私は見ている。

4、結び目と分子式と数字

結び目(ノット)については以前にも書きました。本日の記事でも「閉じた1本以上の紐の輪が絡み合っている状態」とします。ブレイドも絡み目も含み、開いた組み紐は含みません。もちろん結び目はトポロジー(幾何学)の対象ですが、数学に限らず船乗りの艫綱(ともづな)とか前衛アートとか綾取りとか文様とか、芸術も含めて色々な広がりを持ちます。

全ての結び目は、単純な輪の1か所を切って結んで(絡め縛って)再び繋げる(あるいはもう1か所切って交互に繋ぎかえる)という操作の有限回で達成できます。その意味で結び目の全体は群を形成します。単位元は単純な輪で、右回り結びの逆元が左回り結びです。

このように群になるのですが、1列には並びません。すべての結び目に大小の順序は付けられないからです。多次元を考慮に入れても1列に並びません。このことから結び目は群と言う数学の対象でありながら、すべての結び目に名前を付け切ることはできません。それでは同じく群である数字には、やはり無限個あるのにどうして名前を付け切ることができるのでしょうか。

先ず数字は1列なので足し算ができます。もし足し算だけだったら結び目も、あるいは入るかもしれません。しかし数字の場合はさらに等間隔でもあるので、掛け算が入ります。掛け算は同じ数だけ区切って「束ねる」行為です。掛け算が入ると、位取りができるようになります。9の次は10と言った感じです。

この位取りのおかげでどんなに大きな数も0~9の組み合わせで書いて、名前が付けられるようになりました。もし位取りがなかったらおそらく結び目と同じく、20くらい以上は「とても大きい」としか言えなかったでしょう。つまりたとえそれが総体としては数

瞑想録(その20)

学的な対象になろうとも、一列でないと元に名前を付け切れなくて、個々の元を論じることができません。

「一列でないと個々の元の性質を論じられない」、これを私は「単純すぎてがっかりさせる結果」と認識しています。代数学では群に続く概念が「体」とか「環」とかがありますが、これらも結局従来の数字の追認でしかなくて新しい気づきが何もありません。これも私は、「知恵がなくて残念な方向」と感じています。

元の1つ1つに名前を付け切れないと、個々の元を数学的に検討する手段がありません。せいぜいそのいくつかの単純な元に、何らかの名前が付けられて鑑賞するだけです。このように「総体は数学的でありながら個々には数学から除外される」状態、これは個々に関する議論が「エレガントでない」からです。要するに数学的に「美しい」という除外理由です。複雑な結び目はエレガントではありません。

さらに結び目の場合、「より複雑に組んだところ実は一部がほどける状態になる」、つまり「一見複雑だけれども実は最小でない」と言うことがあり得ます。この場合はほどけるだけほどいてやって、同値な最小形を最終結果とします。つまり数字と異なって、「演算の結果が返って単純になる」場合があるわけです。この事象自体は数学的には「エレガント」な「群の立体構造」になる可能性があるはずです。少なくとも検討に値します。

そうなのですが、残念なことに結び目の「ほどける場合」にどうもきれいな法則性がなくてケースバイケースらしいです。このせっきくの多段構造にエレガント性が出なくて、少なくとも今のところ新数学理論となっていません。このように、「デジタルなら何でも数学になる」ではありません。逆にこの業界には「エレガントでないと価値がない」と言う強い不文律であり無言の美的基準があります。逆にエレガントでありさえすれば、どれだけ現実離れしてしようと構いません。

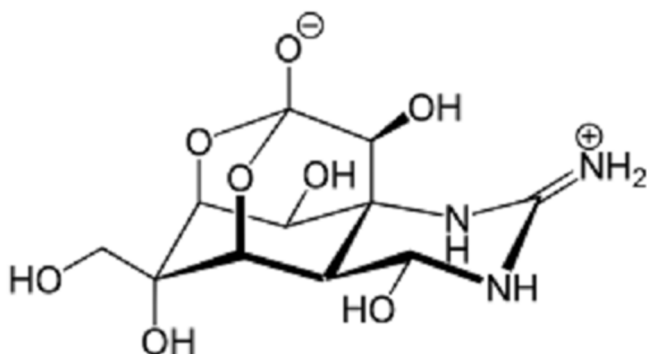
似たような存在に、有機化合物の分子式があります。基本的に炭素骨格で、①ベンゼン系、②ダイヤモンド系、③鎖状系に分類できます。ベンゼン系はSP²軌道で平面六角形が基本で、共鳴エネルギーによる安定化があります。ダイヤモンド系はSP³軌道の正四面体構造で、これは結合角に無理がないために安定です。実際の分子はこれらが部分的にまじりあって、結果として特定の薬理機能があったり重合させて物質として使えたりします。

瞑想録(その20)

有機化合物の結合は「何でもあり」ではないわけです。その規則的な拘束のおかげで、有機化合物の分子式はかなり幾何学的になります。実際にある有機化合物が安定に存在するか否かは、その化学式の幾何形状である程度予想できます。ただし幾何でありながら群にはなりません。零元も逆元も存在せずにひたすら高分子になるだけだからです。

加えて分子式の幾何形状からその薬理や物性を予測するのは難しく、その分子を実際に作ってから測定するしかありません。加えてその有機合成経路も単純ではなくて、分子式の幾何的形狀はほとんど何のヒントにもなりません。合成法はその分野の専門家の勘に頼るしかありません。これは登山で敢えて山の対称形ではなくむしろ非対称な弱点、つまり人が登れるルートを見出す発見法に似ています。

ただ、「分かってみたらなるほど」と言うことはあります。例えばふぐの毒のテトロドトキシンは、①その基本構造がダイヤモンド形であるアダマンタンと似ているために安定なこと、かつ②炭素が一部酸素に置き換わっているために水溶性が高いことなどが、後追いではありますが理解されました。



それはそうなのですが、ここで分子構造式を結び目と同じく無限個のデジタル元の集合と見たらどうでしょう。それは蓋然的に「合成に対する分解」と言う逆演算があります。こういう数学的実体は何か面白いことがないのか、検討の価値があると思っています。群が一番実力を発揮するのは「5次以上の代数方程式に有限回の解析解は存在しない」ことの証明です。このような「便利さ」は、逆減の代わりに逆演算を持ち出しても、無いのでしょうか。

純粋数学の周囲には、「極めて幾何的でありかつ応用範囲も広いのに数学とは認定されていない対象」が数多くあります。ポロノイもその1つです。空間に点を撒いて、それら「各点に一番近い部分はその点に属する」として空間分割をしたものです。ただ

ボロノイもそれ以上に何のエレガントな理論も出てこないで、せいぜい応用数学でしか扱われません。

最近構造折紙とかチームラボの活動とか、数学が広くなる傾向はあるので結構だと思います。少なくともこれまでの数学は、エレガントさに拘るあまりに自分の首を絞めていたのではないかと感じています。

5、情報と価値

「情報」、近年これほどに意味が広がり多様化した言葉も少ないだろう。かつては情報あるいは情報学は、応用数学のような内容だった。情報学科の授業内容も、①統計学等の応用数学、②シャノン流の数値的情報量理論、③計算機言語の基礎(アセンブラーとか)と、④システム工学が中心であった。

それが現代では大きく広がって、芸術や感性さえも一種の情報であると捉えられるようになってきている。これには計算機の高機能化に伴い、計算機を数値計算や事務処理等の固定的な仕事のみならず、芸術のツールにも用いようという一連の活動が、学問の発展に先行しているようだ。

具体的には、①最近流行りのビッグデータ、AI(人工知能)、IoT(どこでもインターネット)と言った従来の理系の延長的な発展のみならず、②チームラボやライゾマティックに代表されるような計算機利用新芸術の発展や、③構造折紙や結び目数え上げと言った新計算数理科学の発展、と言った様々な方面からの活動がある。

しかもこれらの個々の個別的活動が近年になって一元化してきた。例えば①折り紙は服飾学や生物学をも取り込み、②地政学にも数値シミュレーションが入り込む等分野横断的な全体像があちこちで見え始める等の例が多くある。これらの「異分野の垣根の消滅」が、すべてを「情報と言う視点」で見ようという機運を醸成してきた。

今では「情報」はデジタル数学を離れて、「何らかの無形の価値」全体を表す広大な言葉となっている。「情報学」の名のもとに文理融合の、巨大で何でもありの大分野が認知されようとしている。実際にその重さを別にすれば、情報の側面のないものなどありえない。例えば単なる日曜画家の風景画でも、鑑賞者に何らかの感動と感情を引き起こすにおいて情報と言える。

但しその価値は無形であるべきだ。カンナは木を削れるがその削るという物理作用は情報とは言わない。また高速道路のインターチェンジはもしその造形美を語るなら情報であるが、コンクリートの塊や道と言う実用的用途をもって情報とは言わない。このようなソフト性にこだわるのは、そうすることによって情報が脳の働きの鏡として、より明確に認識できるからである。

さて現在の意味での情報には、昔のような量だけでなく質の側面もある。だからこそ情報が広い分野のキーワードになれる。だが難しいことに質には、①量の数字のような便利な言葉がない、②質感は個人により感性が異なる、と言う難しさがある。あなたが飼っているネコの体調と言う情報は、あなたにとっては重要だろうが他人にとっては下らなくて、むしろ知りたくないことである。

つまり「世の中の価値全部が広く『情報』をキーワードに統一された」その価値は大きいものの、その統一原理をどう客観的に表現するかと言うアナログ的課題は、依然として未解決で残されている。加えて仮に「客観的価値」が何らかの手段でまとめられたとしても、その価値は時代とともに変わりうるという問題がある。

芸術家や学者の業績が偉大であればあるほどしばしば、すぐには評価されなくて死後になってやっと評価される。そしてそのころには作品のかなりが散逸しているというのは、良くある話だ。つまり情報の定義を「何らかの無形の価値」と定義したが、ここでその定義の中の「価値」についてもじっくり見ておかないといけない。さもないと単に「情報」と言う語の斬新性に伴う難しさを、「価値」と言う言葉の上に移し替えたにすぎなくなってしまう。

価値、これは昔の情報学の情報量の「エントロピー」と似たところがある。その情報があることによってどれだけ余計な手間を省けるか、あるいはどれだけ成功を保証して失敗を避けられるか、その成果主義的な大きさが価値であると言える。きわめて功利的である。

だがここでまた問題が出てくる。ここで手間とか成功とか失敗とかは、例えば豆腐を作るとか戸籍を発行するとか言った、現在形で効用や善が認知されている事象だけに適用されるのだろうか。それとも例えば廃屋マニアが廃屋の情報を交換し合うとか、勝ち馬の予想屋の予想的中とかそういった、何ら生産的でないことに関する事象も含むのであろうか。

もしあなたがキリスト教徒だったら、世の中の進歩に役立たない後者は価値とは認めないだろう。私はエピクロシヤンなので頭脳的瞑想的価値は、仮に自己満足に終わるとしても価値があると考え。端的に言えばこの記事にも価値がある。もっと広く、「人は遊ぶために生まれてきたのだから競馬の予想も価値がある」と主張する人も居ることだろう。

つまりこれらの議論で分かるように、情報あるいは価値と言うものには前記した①「尺度や客観性や表現手段の乏しさ」と言うアナログ的課題に加えて、②何を有価物とみなすかと言う主義主張の問題も絡んでくるのである。これらの課題の解決は一筋縄ではいかないが、しかしやりがいのある対象でもある。

近年脳の研究が「人類にとっての最大かつ最終の研究対象」と言われている。そして情報や価値の研究も、この隣にあって同じほど大きなテーマである。敢えて予想するならば、今までの情報概念の拡張の原動力が現場であったように、脳研究も含むこれらのこれらの分野も現場主導型で進んでいくだろう。つまり大学や学問手続きの内には最もヒントがなく、庶民の現場にこそ薄くだがヒントしていると思われる。

もしこれら「本来知」が今言ったように「人の行く裏に道あり花の山」であるならば、あたかもテレビ東京が低予算を逆手にとって「素人密着番組」と言う新分野を作ったように、脳解明や情報解明現象が起きるだろう。そのテレ東の敏腕ディレクターが言っていたが、「使える素人は極めて薄くて結局は足で稼ぐしかない」そうだ。つまり物理学のようにニュートンの法則さえあれば何でも解けるわけではない、各論オンリーの世界なのである。この指摘はきわめて示唆的だ。

6、「モサド前長官の証言」を読んだ

この本はモサドの前長官であるエフライム・ハレヴィが著した”man in the shadows”の翻訳本である。モサドとはイスラエル国の諜報機関であり、この国の地政学的特性上から「世界最強の諜報機関」と言って良いだろう。副題は原題に即して「暗闇に身をおいて」となっており、帯には「中東現代史を変えた驚愕のインテリジェンス戦争」とある。

著者のハレヴィ氏はすでに引退しているが、何代もの首相の下で諜報官を務めて最後は長官にまで上り詰めた、文字通り中東史即ち世界史の裏方であった。そしてこの本は裏方であるからこそ知りうる、「本当の歴史」と「歴史の作り方・作られ方」に関する

る最良の教科書になっている。同氏は佐藤優氏の恩師であり、私がこの本を知ったのも佐藤さんの著書の中の紹介に依っている。

この本は翻訳本に良くあることだが、かなり厚い。細かい字で500ページもある。だがこの本が他の外国物と決定的に異なるのは、全く飽きさせないことだ。しつこい重複や言い換えや念押しが全くなくて、すべてが超一級の情報なのだ。だからこの本は他の本の場合と異なって、「集約する」と言うことができない。内容を知りたかったら、自分で全部読んでもらうしかない。

諜報官の特徴は裏から歴史を作ることだ。そして表には出ずに、最後の仕上げは外交官や政治家に任せることになる。「裏から政治家を操っている」と言えば聞こえが良いが、「最後の成果は他人に持っていかれる」と思えば報われない仕事でもある。必要な能力は臨機応変な柔軟性と、相手の裏を感じ取る天性の勘である。外交官のような儀礼はむしろ邪魔である。

接する相手も敵味方の工作員や敵側の無名の情報提供者から始まって、自国の首相や敵国であるアラビア側の国王や側近に至るまで多種多様である。場合によっては敵方のエージェントと、無言の信頼や友情関係すら生まれる。そして特に情報提供者など絶対に悟られてはいけないので、本に書けることは著者の経験のほんの一部だろう。それでも十分に波乱万丈で、読んでいるとさも「自分が歴史を作っている」かの気にすらなる。

著者はイスラエルの諜報員なので、最終目標は常にイスラエル国の存立と安泰である。イスラエルはその独立経緯からも分かるように、アラビア人の領土のど真ん中にパレスチナ人をどこかで強引に作った国である。イスラエルはそれを既成事実化しているが、アラブ諸国は認めていない。そんな環境にあるためイスラエル人は誰でも愛国心が旺盛であるが、しかし「全員一致」のような単純なことではない。

こと政治外交だけを取ってみても、政府、軍、諜報と役者が3人もおり、かつそれぞれの関係は微妙である。政府にしてもたいていは右側のリクードと左の労働党が頻繁に交代し、更に場合によっては宗教政党が連立して、内閣すら一枚岩でない。

この複雑な背景を結果的に補うのが、アラブ諸国の思惑の微妙なずれと弱小国の国王や大統領の保身である。だから諜報戦での仕事とは、互いに相手の弱みを熟知しつつの駆け引きとなる。打った手が必ず成功するとは限らないし、せっかくの密使としての裏工作を土壇場で外交官に潰されてしまうこともある。

瞑想録(その20)

それでもこの本を読むと、佐藤優氏が訴えるところの諜報活動の重要性が良く分かってくる。そして佐藤氏が主張する「自分が葬り去られた理由」、それは「外務筋が自分の利権を取られるのを恐れたからだ」という理由も、全面的にはではないものの理解できる。

ちなみに日本も戦前には諜報活動を行っていた。もちろんそのほとんどは表に出ないので今や知る由もない。それでも例を挙げよう。日露戦争終結のポーツマス条約締結の際に日本が樺太の南半分を獲得できたのは、当時同盟国だったイギリスからの極秘情報によってである。また日露戦争前のロマノフ王朝の弱体化には、日本の諜報官であった明石原二郎による「共産党支援」と言う大活躍があった。

現代が情報の時代であるからこそ、諜報はなおのこと重要になる。だが諜報の比重が高くなりすぎると国民はまた政治の蚊帳の外に置かれて、民主主義が正常に機能しなくなるという危険もはらんでいる。いわば両刃の剣なのだ。

我々現代日本人は諜報と言うと韓国を、工作員と言うと北朝鮮を連想して、どちらも良いイメージはない。だがこの諜報あるいは密使と言う仕事自体は実は超優秀で超柔軟な脳を必要とする、きわめて知性の高く勇敢な仕事なのだ。この平和ボケした時代、人余りの時代に、起業や平和運動も一つの道だろうが、諜報活動そのものとまではいわなくてもそのような素養と教養を身に着けることは、今後の日本にもそして本人にとっても、「忘れられた基本素養」であるように、この本を読むと思えてくる。

私は学生の頃は理系人間だったので統一原理や求解が快感であり、「ここが自分の骨の埋め所だ」と確信していた。だが今回この本を読んでかつ自分の今までを振り返ってみると、「諜報という頭の使い方もあったのか」と、目から鱗が落ちる思いがした。ある意味諜報は数学や物理の大定理、例えば相対論や量子論よりもはるかに知的でエキサイティングなのである。

なおこの本を理解するにはできれば、イスラエルの建国史とアラブ諸国の独立過程についてのある程度の知識があったほうが良い。

7、数学の現実性

瞑想録(その20)

算数の現実性や実用性については以前に検討した。特に四則演算は将来どのような仕事に着こうとも、生活に必須である。では算数を超えた数学についてはどうなのかを、本日は瞑想してみる。

もちろん数学は世の中一般には役に立っている。モノ作りにはことごとく必要だし、知られていない身近なところでは「デジカメによるデジタル画像の保存や切り取りの自在」も実は数学のおかげである。ただしこの実用性と、専門家でない一般市民が数学をどれだけ学ぶ必要があるのかは、別問題である。

一般に数学の3大分野と言え、解析、幾何、代数の3分野を指す。ただこと大学入試に関する限り、解析分野の比率がどうしても高い。これは第1に数学の履修者として、将来の数理科学者よりも数で圧倒的な電機・機械・土木と言った工学者を想定しているためである。そして第2の理由は、解析の問題が一番作りやすいためである。

数学の入試問題は一般に、①微積分、②複素数、③三角・指数対数関数、④その他(確率とか整数)の4分野から1問ずつと言うのが相場である。もし数理科学向きの科目にしたいなら、少なくとも集合と群論を高校で教えるべきである。

さてここでは数学の履修内容の代表的な切り口として理系の難関大学の入試問題、具体的には東京工業大学の今年の入試問題を見てみよう。具体的な問題文は下記のサイトで閲覧できる:

<https://www.densu.jp/frtokyokogyo.htm>

本日の数学の役立ち加減を見るのが目標なので、あくまでも全体像の概観のみ以下に記述する。

今年は大問5題より構成されていて、大問1が整数論、大問2が三角関数の積分、大問3が幾何学と最大値、大問4が組み合わせと極限、そして大問5が複素数と方程式であった。全体構成が前節に述べた4分野から成ることと解析学の割合が高いことは、一般傾向通りである。

ただどの問題も数学的思考能力、具体的には①全プロセスを大きく見通す見通し力と、②それを具体的に式に落とし込む細心の能力の双方を要求されているという意味で良問である。これらの能力を一言で「数学的センス」と言うのであるが、どの問題もこの能力を試すように仕組まれている。

瞑想録(その20)

この内整数問題と組み合わせ問題は現実でも大学の数学でもあまり出てこないが、地頭を試すのには良い尺度になる。幾何学も空間認識と言う重要な意義があり、解析学がひたすら計算である偏りをうまく埋め合わせている。

ただ一般に本来の意味での幾何学は、「円と三角形の幾何学」であるところ、その本来幾何における諸定理は結局のところすべてが「①円周角と②相似と③角度の総和の3つに帰着できる」という意味で単純すぎる。独立して入試問題とすることには向かない。クイズや頓智のようになってしまうのだ。

東工大の大問3は先の分類で一応「幾何学」に分類した。具体的には「長方形を斜めに折った時にはみ出る部分の面積を計算する」と言う問題で一応幾何である。だがこの問題は実は計算力のある人なら、空間把握の能力がなくても形式的に計算出来てしまうのだ。

そして一昔前まではそれでも良かった。だが時代の進歩とともに最近では、数学においても「式や数字にならない感性や空間把握」が大切になってきている。そして今年はこの問題用に、問題用紙の他に「折り紙」も配られたことが話題になった。

そうすることにより空間把握能力に優れたものを救おうという、苦肉の策であろう。空間能力はひいては「人を見る目」とか「気配を感じる」とか「芸術理解」とか「勝負の勘」と言った感性的能力に繋がる、現実人生にとってはもちろんのこと研究遂行にも実は重要な能力なのである。ましてや最近特に重要となっている国際競争力のキーワードである、起業家精神の涵養にはこちらのセンスが圧倒的に必要だ。

そもそも最近の学問領域間の壁の低減と分野融合の傾向によって、たとえ理系人間でもこういう能力がより重要になってきた。そもそも昔だって、例えば橋を設計するならば構造強度だけでなくバランスセンスが、化学反応を開発するなら原子価の過不足だけでなく反応が進みそうな経路の発見と言うように、計算以外の能力は重要だったのだが、それが今特にクローズアップされてきている。

実際東京工大でもここ数年、「単なる計算屋は要らない」として、著名な池上彰さんを招聘してリベラルアーツ(教養科目)充実を図った。ハーバード大卒のお笑い芸人であるパckンが授業をしたと、話題にもなった。教養科目充実と言っても、学生の勉強総時間がそうそう増えるわけではない。だからこの決断は実質的に、「専門にかける時間が少しくらい削られても」と言う覚悟が教授陣にあったことだろう。

瞑想録(その20)

これらの諸措置や最近の学問や芸術の傾向を総合すると、本日当初の問題提起である「数学は一般人の日々にとってどれだけ必要か」と言う問いの答えは、「論理的思考能力をある程度高めてはくれるが日々の生活における判断力と全く同じではない」と言う答えになりそうだ。

なぜそうなるかと言えば、今概観した数学の入試問題の具体的ネタ、微積分にしても複素数にしても整数論にしてもその大元は数字の「一列等間隔」という過ぎた理想化に基づいているからだ。掘った芋だってどれ一つ同じものはないのに、人は安直に数字で「1個2個・・・」と数える。

そしてその理想化の故に数学は①掛け算が入り②位取りが入り③複素数が生まれ④微積分が考案されえたのだ。まあ「ここまでの単純化が逆にここまでの複雑論理を招来する」というのは、ある意味驚きであり、その教訓が悩ましいのだが。

実は現行の高校までの数学、大学に行ってもその更なる延長で①線形代数とか②行列式とか③フーリエ変換とかそれなりに新しい素材は出てくるのだが、基礎的考え方と言う意味では高校の授業まででほぼ完結している。そして現代の理学系の純粋数理科学はこれとは別の方向に進んでいて、エレガンスと言う旗印の下で一般社会との接点はほとんどなくなって、神学や哲学ほどにつぶしの効かないものになっている。

高校までの数学も製造会社の万年平開発社員には必須だが、経営者や起業家の素養としてはちょっと偏りすぎていて、場合によってはかえって足かせにすらなる。もっともそれでは「リベラルアーツや折り紙配布がどれだけ直接的か？」と言うと、これも正直に言って疑問がある。さもないと今従来の数学をくさした後で、評価が不公平になる。

結局学問と言う「無謬が最重要な手続き」そのものが、現実社会の常識的判断能力涵養にとって直接的でないのだ。もし直接性を狙うならむしろ、自衛隊のパイロット候補選抜試験のような適性検査にしまった方がよほど早いだろう。ただあるいは専門学校ならこれができても、大学は建前上これができない。

敢えて肯定すれば学問には先にもみたように、「①目標までを見通す抽象的透視力と、②それを実現するための具体的詳細ステップを鍛える」と言う組み合わせの場にはなっている。しかもこの能力の有無が地頭(じあたま)の良さとある程度の相関があると言う意味において、学問や数学の存在意義があるということになるだろう。

それでもなお、「即座に面白い答えが返せる一流のお笑い芸人の大半は高卒だ」という事実は、「大学が決して全能力を測定しても居なければ涵養もしていない」という、重要な留保の根拠として十分に雄弁だと思われる。

8、ここに留まろう

最近にテレビ東京のディレクターが書いた、「TVディレクターの演出術」と題する本を読んだ。副題は「物事の魅力を引き出す方法」だ。この本を読んだ理由は「無名の庶民掘り起し」と言う新分野を創成した、その経緯と方法と努力について知りたかったからである。

テレビ東京はご存知のようにキー局としては後発で、しかも設立当初の目的は「科学や学術の新興」であったために、長い間採算が取れずに解散もささやかれたほどであった。番組作りの予算も他局の10分の1で、「これでいったいどうしろと言うのだよ」と言う感じだった。

そこで出てきた苦肉のアイデアが、「有名芸人が高くて使えないならば素人をいじって面白く作ろう」と言う方針だった。ある意味かつてのアサヒビールのスーパードライと同じで、「ダメで元々当たればラッキー」と言う、最下位だからこそできた決断であった。

この方針は結果として、「テレビチャンピオン」「田舎に泊まろう」「開運なんでも鑑定団」「アドマチック天国」「ユーは何しに日本へ」等々一連のヒットを通じて新境地を開拓した。今や先行の他局が真似をするほどになっている。平均視聴率も万年最下位を脱した。

ダメ元とは言え新分野の創成、これは社会学的に大きな成果であり現象である。我々個人の日々の活動方向にも参考になり、学習するに値する。そしてこの本の著者に言わせるとその究極的なコツと言うか基本的態度は、①事前調査と②現場での足稼ぎで、その根本は好奇心と常識だという。

先ず面白い素人がそうそう居ない。しかもやっと思ついたらすでに他局で使われていたりする。TV業界は映画と違ってつまらないとすぐにチャンネルを変えられてしまうから、既視感のあるものはダメなのだ。こうして敵の隙をぬって濃度の薄いところからそれなりの外道を釣り出すには、並の機転ではだめでひたすらベタの努力だそうだ。

瞑想録(その20)

この本に挙げられている例を一つ紹介する。まず①航空写真を見ていて三浦半島の河岸段丘が珍しいと思った、②これだけでは教科書にしかないので写真を何枚も見たら段丘に沿って斜めに立っている珍しいマンションを見つけた、③現地に行って変質者と間違われながら住人を何人もインタビューしたところ、「亡くなったご主人が船員だったので彼を思い出せるこの海辺のマンションを選んだ」と言う老婦人に巡り合った、④この名もない婦人の「後半生を追う」と言う趣旨の番組を作って結構な視聴率を得た、とのことだ。すさまじい「足の努力」である。

私はここまで読んでふと思ったのだが、なぜこのディレクターはそうは言ってもわずか30分でかつ1回垂れ流したらお蔵入りみたいな仕事に、そこまで没頭できるのだろう。もちろん流した時には数百万人が見ると思えばそれなりにやりがいがあることも分かるが、今は「1分流するのに元映像は1時間撮影する」と言うのは当たり前だそう。調査・踏査・撮影・編集・音入れ、チームを組んでやるにしても大変な手間だ。

まあそもそも番組を作りたくて入社した人だから、最初の10番組くらいはあるいはやりがいも緊張もあるだろう。だが映画と違って後にDVDで残ると言うこともないいわば使い捨ての仕事に何十年もめげずに頑張れる、これは少なくとも私にはおよそ想像できないことだった。

私は大学時代、所属していた学科に興味がわなくて他の分野を洗いざらい覗いてみたが、結局代わりに勉強したい分野は見つからなかった。クラブ活動は面白かったが、それも3年もやったら「分かって」しまった。会社に入るときもおよそ仕事に何の期待も持てなかったのも、消去法的に大学の学科と一番遠そうな会社に入ってみたが、やはり奇跡は起きずに日々砂をかむようだった。趣味もいくつかやったが、どれも数年すると「分かって」しまった。

だから本来の読書の目的だった「新文化創造」以前に、このディレクターのように「一所懸命に何か所で頑張る」と言う気持ちが全く理解できなかった。人によっては「目的は出世であって目先の手柄はそのタマだ」と言う人も居るだろう。だがこの人の本から覗えるまじめさは、そういう種類の人とは思えない。

瞑想した結果そこで出た結論は、この人にとっては「素人掘り起しによる番組作り」が天職だということだ。このとは運良くはまる場所、死に場所と言っても良いかもしれないが、それを見つけれられたということなのだ。この人の好奇心や行動力やその元になる性格が、たとえ番組は使い捨てでかつ努力の種類は毎回類似であっても、毎回少し違って起こるハプニング的要素に、この人は尽きない感動を覚えているのだ。

私の経験からしてもまた今までであった人達を見回しても、ほとんどが惰性でサラリーマンをやっている人だった。「ここが死に場所だ」と言う舞台に出会った人に出会った覚えはない。その意味でこの人は実にラッキーな、幸せな人なのだ。ちなみに今の私のライフワークは、このブログに成果を定期的にアップしている瞑想と美術館・博物館巡りだが、本来の飽きやすい性格ゆえに、今日はそうでも明日は分からない。

先日にとある美術館で奇妙な絵を見つけた。撮影禁止だったのでアップできないが、目が死んでいる万年平サラリーマンが蕎麦屋で昼飯をかけこんでいる絵だ。死んだ目、これはサラリーマンが全員そうだし当の自分もそうだから良く分かる。

ところがその絵の恐ろしいところは、そのそばを出している店主のオヤジの目も死んで落ちくぼんでいるのだ。目の死んだ客と目が死んだおやじの一時、おそらく日本のほとんどの実態がこうなのであろう。でもそこまで全員死んでいるのなら、もう全員一緒に仕事など辞めてしまえば良いじゃないか。

このゾンビのような時代と世界にあって、場にはまりやる気のある使い捨て番組のディレクター。私はこの本から文化創成プロセスと言う当初の目的よりも、その動物園の目玉の珍獣ほど珍しい存在の発見に、驚嘆したのである。

9、数字と言葉の大落差

先日にも問題提起したが、無限個ある数字にことごとく名前が付けられるのは、位取りと言う便利な方法があるためである。そして位取りの大元は掛け算の存在にある。10個ごとにまとめて位が上の1と置くのだ。そしてさらに掛け算の大元には、数字が「等間隔一列だ」という事実がある。

単に「デジタルである」と言うだけでは、結び目の例で分かるように、こう上手くはいかない。実際に数字の「等間隔一列」、この条件は少しも弱められない。さらに掛け算があるおかげで位取りのみならず、方程式、微積分、三角指数対数関数、整数論、確率論、複素数等の数学の深い体系ができるわけであって、これらの壮大な建物も先の条件を少しでも緩めるとすべて崩壊してしまう。

それにしても「事物が1列等間隔」とは、絶望的に幼稚なまでの単純化である。畑の芋だって掘り起こしてみれば1個1個皆違うのに、その違いを一切無視して「1個2個・・・」と数えるのだ。やりすぎである程に現実離れしている。そしてこの根本での現

瞑想録(その20)

実離れが、今挙げた諸数学が「現実には直接には役立たない」ことの理由になっている。

これほどに幼稚で非現実な数字と数学だが、圧倒的な利点は言葉よりはるかに厳密に事物を表現できることにある。例えとして人類が、数字は知っていても掛け算は知らないでしょう。そうすると位取りと言う知恵がないから数字に名前が付けられるのはせいぜい20くらいまでで、あとは「たくさん」と言う1つの言葉になってしまう。

もちろん「たくさん」にも「非常にたくさん」とか「少したくさん」とか多少のバリエーションは付けられるが、数字が例えば「27645」のように具体的に明示できるのに比べれば焼け石に水だ。きめの細かさや式にできる強みについてはおよそ比較にならない。もちろん言葉は「数字には出来ない思想等を語れる」から、「数字の方が言葉より優れている」などと単純な順序付けはできないのだが。

さてこの事実が語ることは何かというと、「数字は狭いところで膨大かつ強力な手段を保有している」と言うことだ。この膨大と強力のおかげで数理科学は世の中の特に外的な物理現象、ひいては科学全般を構築できることになった。これ自体は偉大なことだが、もし「人類は数字のおかげで全知全能だ」などと思うなら、これは大間違いである。

現在の物理学は力学や電磁気学はもちろん量子論や相対論を通して、「基礎方程式を基に宇宙の全部を知り尽くし得る」かに見える。一見目がくらみそうだがこれは実際には、数字や方程式の表現可能な「狭い範囲」でかなりの事実を知りうるというのがより正しい認識である。加えて「全ての物理は数字で表現可能である」などと言う保証はどこにもない。この確信は高々信仰だ。

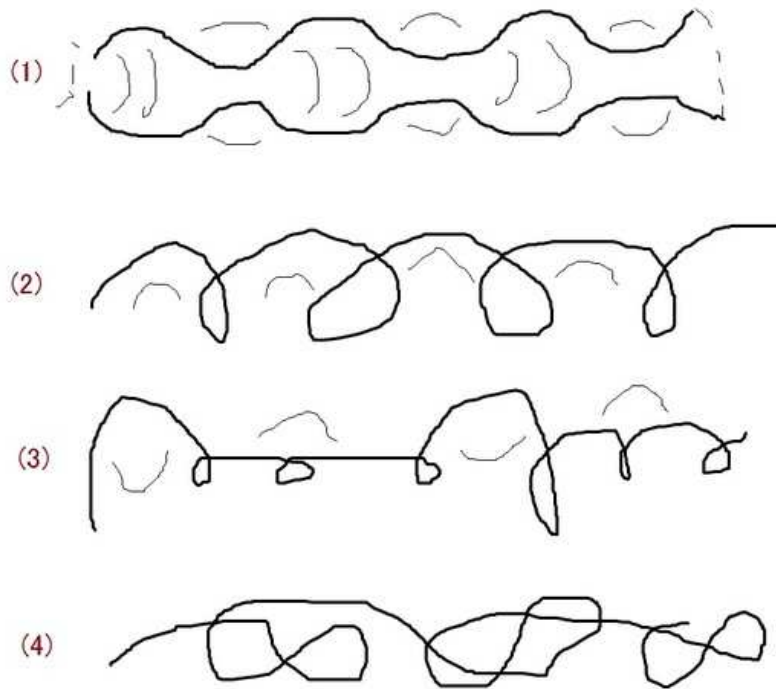
事物をデジタル(有限)とアナログ(無限)に分けた時に、数字のおかげでデジタルについてはかなり知りうる。だがアナログは言葉でしか表現できないので、もしこの数字化不能世界に物理の本質がある場合には、人は永遠にそれを知り得ない。

そんなものがあるとはほとんどの人は思いも至らなくて、立式可能な数字の世界で完結して「これが全部だ」と自己満足しているのが実態である。そう言う「表現不能物理は」おそらく、これらの人々の素朴な信仰に反してたくさんあって、表現できずに置き去りにされているだろうと予想する。

瞑想録(その20)

こう言うアナログの典型が波動である。点と波動は双対なのだが、点の方は数字で良いとして、人類は波動の方のほとんどを知り得ていない。「波は三角関数だ」と断定する向きが多いが、三角関数は周期と振幅と位相と言う高々3つの数字で規定される、むしろデジタル波である。

ここで波をより一般に、「エネルギーや情報を伝播する媒体」と広くとらえるならば、下記に図示する各種の波動、たばこの煙をドウナッツ状に吐き出す「パフ波」とか、船のスクリューが作る「スクリュー波」とか、さらにはソリトンではないが単発で伝播する「孤立波」等々、いずれもその存在は直感的だが、およそ式に表せない。二階の微分方程式の解でもない。そんなに世の中が調子よいと勘違いするのは、数字の幼稚さに惑わされているからだ。



量子論の基礎である波動力学の定式化を復習してみよう。まず一般力学を構成し、これをラグランジュアンに書き換え、更にエネルギー型のハミルトニアンに書き換えたうえで、正準交換関係を前提に運動量を一次微分に置き換えるとシュレーディンガーの波動方程式になる。この変形手順は美しく芸術的ですが、それでも上記の手順はこの式が解になり得ることを示すだけであって、「この式以外に解はない」と言う意味の排他的な結論ではない。

つまり可能性として、我々の知らない波動方程式はもっとほかにもあるのだが、それが数値化可能性や立式可能性の外にあるために、原理的に表現できずにいるだけなのだ。表現できなくてもあるいはいつか現象として観測されるかもしれない。

これ以上主張すると似非科学と言うレッテルを張られそうだが、そして実際に似非科学や超常現象のほとんどは似非なのであろう。だが今は似非だとか非物理だとか思われている未説明現象の一部は、この「立式表現不可能で言葉だけの波動や実態」が実相であってもおかしくない。

これら表現する新たな可能性を追求することには価値とスリルがある。それはおそらく数字ほど基礎的で条件的であるが、しかし数字とは全く異なる体系であろう。無限やアナログや現実世界の複雑さと巧妙さを見つめていると、いつかそれは見えてくるかもしれない。少なくとも「絶対に見えない」と証明されたわけではない。

私的にはヒントは「超無限」の態様にあると思われる。

10、日常の論理

以前に佐藤優さんの本を読んだら、「諜報には論理学も大切だ」として教科書が紹介してあった。その教科書の内容は次のような問題の羅列である：

「吠える犬は弱い＋うちのポチは良く吠える＝うちのポチは弱い」、この命題は真か偽か。

正解は偽である。そして理由は、「ポチが犬だとはどこにも書いてないので三段論法を構成しない」であった。要するに佐藤さんが紹介の本は、内容に関係なく形式で判断できてしまう三段論法に限って、それへの適合可能性で陽動させているだけの内容なのだ。こういう形式論法は①三段論法と②背理法くらいだ。あと数字に限れば③「 $A < B < C$ ならば $A < C$ 」と言うものもある。

こういう形式論理も諜報や日常には必要ではあろう。だが直感的自然性と裏読みが命の諜報が、この手の計算機にもできそうな形式論理で事が済むとはおよそ思えない。そもそもわれわれの日常の判断もそのほとんどが非形式論理、つまり条件次第で内容次第で具体的な意味に沿った状況論理あるいは蓋然論理に依っている。

瞑想録(その20)

これら現実的な状況論理は我々の日常活動のほとんどがこれなので、例などいくらでもあったたまたま身近にある本の適当なページを開いても必ず例がある程なのだ。まあ私の身近から以下に一例を引いてみよう。この例は図書館に問い合わせの電話をしたときのものである。

私「注文した本のうち1冊だけちっとも回送にならないのですが？」

図書館員「その本は文庫本なので他の本に隠れているかもしれないです」

私「蔵書している分館をプッシュしてみてくださいませんか？」

図書館員「分かりましたがどうしても出てこないことは希にありますね」

私「その時は仕方ないので今到着している本だけ受け取りに行きます」

まあよくある変哲のない日常会話です。まず「文庫本なので隠れちゃっている」、これがどうして通るのでしょうか。ここに形式論理はありません。ただ今までの人生経験から、①文庫本は小さくて曲がりやすいので、②別の本に隠れてしまいやすいことが、③半分景色でそして半分論理で納得できたわけです。言い換えれば文庫本を知らない人は、仮に論理学の天才であっても納得ができません。

次に「見つからないときは既にある本だけとりに行く」、この対応策を直ちに想到出来たのはどういう仕組みでしょう。実は当地の図書館ネットでは、未到着の本は注文をキャンセルできるように組まれているのです。この知識を能動的かつ瞬間的に応用してこの発言と決断に至ったわけで、ここでも形式論理は一切出てきません。

次に推測の例です。形式論理には推測なくて真偽のみですが、蓋然論理は推測と深い関係があります。形式論理と異なって意味を基に推測することにより、その真偽と言うより蓋然性の程度を見極めるわけです。

娘「イベントで思ったより漫画が売れたよ」

私「それって思ったより人が来たと言うことか？」

この時の推測としては「思ったより漫画の出来が良かった」と言う可能性(推測)もありますが、一番常識的なところで推測したわけです。この裏には体験に基づいて、「品質が急に良くなることはそうそうない」と言う蓋然論理が働いています。この蓋然論理も形式論理とは無関係です。

元アナウンサーで随筆家の下重暁子さんは、地頭(じあたま)の良し悪しの判断基準について次のような蓋然論理を提案しています。「自分と親戚のことしか話題にない

人は頭の悪い人」。これは極めて切れの良い蓋然論理で、偉大な発見とすらいえません。依然として形式論理でもなければ証明する根拠もないですが、この法則は経験上ほとんど確定論理ほどに鉄板です。要するにサザエみたいな家が愚鈍の典型的なわけです。

「空腹は最大のソースである」、ことわざでかつ証明もないのでこれも蓋然論理ですが、反対する人はいないでしょう。これも鉄板です。他方で「4当5落」、「5時間以上寝る受験生は受験に失敗する」という意味の流布ですが、この言説の蓋然性には疑問を持つ人も多いことでしょう。ことわざだから常に真と言うことはありません。

このように人が日々用いる論理のほとんど全部は蓋然であって、形式も根拠も証明もなくひたすらに具体的意味と感覚が頼りです。ではこういう世の中の実勢にあって、形式論理や数学のような確定論理を学ぶことに何等の価値はあるのでしょうか。

数学や論理学に限らず研究や学問一般ですが、これは以前にも指摘したように、①最終までも遠く道筋を見通す企画力と、②その見通しを具体化していく各詳細ステップの実現力と言う、一見矛盾する能力を立体的に得るためのツールとしてはそれなりの意義があるということです。この組み合わせは人生に非常に大切であり、イエスさんも「蛇のように細心に鳩のように大胆に」と聖書で指導しています。

そしてもしこの組み合わせが矛盾だと言うなら、人生そのものがそもそもの矛盾なのでそれに合わせるのが吉だということです。もし数学や論理学を文字通りに理解して実践しても、万年開発平社員か理系バカになって女にもてないのが落ちです。狙わなくても地で受けて、おバカな失笑を買います。

まとめますと本日の結論は、「日常のほとんどが蓋然論理であってその背景は日々の経験と意味理解の積み重ねだ」ということです。具体的な態様はきわめて個別的なので、反復が必須の学問的手続きには乗れません。そして、「脳の働きも同様だ」と推測します。

11、サーフィン波

もうすぐ夏、サーフィン愛好者にとっては季節が目の前だ。サーフィン波とは遠浅の海で打ち寄せる波が、立ち上がって前のめりに丸まって落ちる際にできるトンネルだ。そしてサーファーはそのトンネルを潜り抜けてスリルを楽しむ。ところで素朴にこのサーフィン波は、どうやってできるのだろう。

瞑想録(その20)

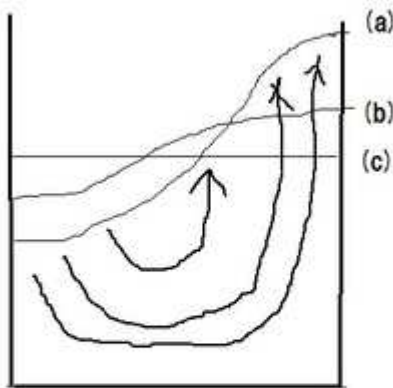
(理由1) 波には立ち上がる性格がある。

波は振幅が小さい内は正弦波(サイン波、図(1)の(b))なのですが、振幅が大きくなると高い方は立ち上がり低い方は単にへこんで、非対称になります(図(1)の(a))。これは波の非線形項(移流項)のせいではありません。

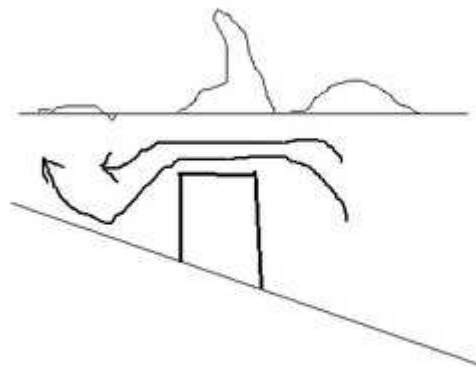
移流項は時間をかけてじわじわ効くもので、半振幅ほどの短時間ではほとんど効果がありません。液面揺動は基本的に左右に行ったり来たりを繰り返しますが、もし移流項で曲がっているのなら移流項の効果は非可逆的ですから、液面が戻った時(図(1)の(c))で再び平らにはなりません。

ではなぜ揺動波は立ち上がるのでしょうか。それは流れの流線(図(1)のU字曲線)は容器壁と交われない性格があり、液面の押し下げられた側(図の左半液面)は流線が圧縮されて逃げ場を失ってそれ以上下がれず、その分逃げ場がある右半液面の方に波が伸びるからです。

ですから波と言うのは「突っ立ち」はあってもその逆の「狭角切り裂き」はありません。もしこれが突っ立ちの理由なら、十分に深いところの波はあるいは突っ立たないように思えるのかもしれませんが、流線の逃げ場があるからです。ですが波の流線は基本的に液面近傍に局在しますので、水の底が深くなってもこの突っ立ちは発生します。



図(1)



図(2)

瞑想録(その20)

(理由2)乱流量はほぼ保存する

上の項は移流項が効いていない場合の話でしたが、実際の海は流れのもみ合いや底面との摩擦等によって移流項が発達した状態、つまり乱流状態になります。乱流とは基本的に小さな渦の集まりであり、渦は拡散による消耗を除くと保存する性格があります。台風がなかなか衰えないのと同じ原理です。つまり「乱流量は擬保存量だ」と言うことになります。

さてここで没水型消波堤(図2)を考えてみましょう。沖合から寄せてきた波はこの消波堤が水没しているにもかかわらず、この上に來た時に碎波しておとなしくなります。これはほぼ保存量である乱流量が消波堤の為に下方に逃げ場を失って、その分上昇して波を非線形に高くするために碎波に至るわけです。

海の寄せる波が岸に近づくにしたがって立ってきて崩れるのも同じ原理で、底が浅くなって乱流の逃げ場が無くなるためです。なお移流項による非線形な波の突っ立ちには先の線形の突っ立ちと異なって非線形特有の「回り込む」様相を見せます。実際線形の突っ立ちだけでは、回り込まないので碎波には至りません。

(理由3)サーフィン波

以上に見たように液面は①線形効果と②非線形効果のどちらも波を突っ立たせる効果があり、しかも水底が浅くなるほど顕著になります。サーフィン波の構成は、①大きく突っ立つ、②丸まってトンネル状になる、の2段階ですが、このうち第1段階は主として線形立ち上がりが寄与します。これがないと消波堤の場合のように単に碎波するだけで、大きなトンネルは形成しません。

その突っ立った波がトンネルのように丸まる、これは移流項の「回り込もうとする」効果です。以上2つの効果が相乗して、サーフィン波と言うトンネルが形成されると考えられます。サーフィン波のトンネルの先端をよく見ると白く泡立っていますが、これは強度の乱流の表れです。

サーフィンが趣味の皆さん、今年も良い波場を見つけてサーフィン波のスリルを味わってください。

12、下らない

人には時として「下らない」と言う感情が沸き起こる。「バカバカしく過ぎてとても付き合っていられない」という一種の虚脱感だ。

瞑想録(その20)

最近もある若い介護職員が自分のブログに、「ぼけた爺さんのたわごとを聞いて一緒に折り紙折ったりするの、もう下らな過ぎてとてもやってられないよ」と書いていた。不謹慎ではあるがその気持ちは良く分かる。これを本日の第1の例とする。

そもそも「下らない」はあってもその「正」に当たる「下る」は無いのだから、この言葉自体が日本語の不思議と言えバ不思議だ。ただ今日の論点はそこではなくて、「下らない」という感情の構造に光を当てたい。まあ下らないにも深刻なものから笑えるものまで色々あるが、「力が抜けるほどだ」と言うのが共通した感情だろう。

本日の2番目の例は吉幾三の持ち歌で30年以上前に流行った、「俺ら東京さ行くだ」の歌詞だ。東北弁と思しき田舎弁丸出しの歌詞であるところがそもそも笑える。まあ地方創成の現代にあっては、「けしからん」と叱られそうな自虐の歌である。

「ハァ テレビも無エ ラジオも無エ・・・
朝起きで 牛連れて 二時間ちよつとの散歩道・・・
電話も無エ ガスも無エ バスは一日一度来る。」

これが前半部。前半のイントロ部分ですでに笑える。笑いのセオリー通りに、「相手がこけにされている分聞いている我々が優位に立っている」ところの「超安心感」が根底にある。

続いて落ちの部分、
「俺らこんな村いやだ 俺らこんな村いやだ～、
東京へ出るだ 東京へ出たなら 銭コァ貯めで～
東京でベコ(牛)飼うだ～。」

最後の一行が笑いを通り越して何気にブラックが混じり、「これはもうダメだ、同情の余地がない、つける薬がない」、つまり「もう下らない～」と言うため息も混じった虚脱状態になる。百歩譲って田舎者が東京に出たい気持ちは分かるとしても、その東京に出てやるのが「牛飼い」とは、「全然分かっていないじゃないかこのカップペ」と言う落胆感情だ。他人事ながら力が抜ける。

ちなみに最後の落ちの部分が2番3番ではそれぞれ、「東京で馬車引くだ～」、「銀座に山買うだ～」となる。もうダメの上塗りである。これ以上何をか言わんやだ。ここまで

瞑想録(その20)

徹底して下らなければ、やはり目立って受けるだろう。吉幾三はなかなかの芸達者だ。一言で言えば「下らな過ぎの連続だから実は無視できない」のである。

一般に「下らない」には笑える場合が多いものの、冒頭の介護職員の例で出したように深刻な場合もある。「良い大人にチーチーパッパなんかやらせるなんて下らない」と言う訳だ。こちらは怒り心頭の「下らない」である。どちらも極限状態だという共通点はあるが、その極限の方向はむしろ正反対だ。

これら全般を概観すると「下らない」という感情は、「これ以上はない極限状態」であるときに出現する感情と見える。では「極限ならば常に下らないか」と言うと、これがそうでもない。17年前に米国でイスラムのテロリストが飛行機を乗っ取ってビルに突っ込んで、大勢の人を殺した。これも極限だが「下らない」とは言わない。むしろ逆に重篤な超緊急事態だ。

では極限状態のどういう場合に「下らない」という感情が沸き上がるのであろうか。その追加条件とは思ひ、
「もう何も打つ手がない」「お手上げだ」「放っておけよ」と言った場合の極限が「下らない」になるのだ。「下らない」のそもそもの語源は「通らない」と言った感じだそうだ。「下る」とは言わないもののこれが「通る」という感じだと言われれば、そんな気がする。

しかし冒頭の例は、世の中に役立っていて賃金ももらえる仕事が「下らない」と言っている。このケースについては対策が要らないのか。むしろ真剣に考えるべき場合ではないのか。そう言う反論はありうる。ここは区別が分かりづらい。介護職員は「ぼけた爺さんに関して自分は打つ手がない」と言っているのであって、介護職自体が不要だと言っているわけではない。できればロボットとかにやらせるべき仕事だが、仕事自体の必要性を否定しているわけではないのだ。

TV番組も垂れ流しの時間埋めなので下らないものが多いが、中でも「これは下らない」とひととき感心する企画があった。「歌手の南ランボーにミイラの恰好をさせてマチュピチュに行った振りをする」という企画で、きっかけ「ランボーの長い顔がミイラに似ている」とのことだったが、下らな過ぎて南自身もふてていた。

ダジャレも下らないものの典型だが、これが下らないのも一種不思議だ。「英語でダジャレを言ってみろ」と言われても極めて難しい。つまり実はそれほど頭を使ってるのだ。それでもなお下らないのは、期待に比べて答えの落差が非常に大きいからだ。

パロディにも下らないものが多い。と言うか「如何に下らないか」で競うい合うのがパロディと言う分野であり、さもないと存在価値を失って著作権抵触になる危険をはらんでいる。最近も「社畜・修羅コーサク」と言うパロディ漫画が受けているそうだ。「課長島耕作」のパロディだ。社畜が最低な上に画風が劇画調で北斗の拳を想像して落差があり、なおのこと下らないらしい。

あと典型的な下らない例に、「クソゲーで時間をつぶす」と言う場合がある。やっている人すらしばしば下らないと自覚しながらやっている。この「下らない」は、今までに挙げた条件からはどの辺に入るのだろう。極言としては「これ以上ない程役に立っていない」とか、「これ以上ない程の石潰しだ」と言う感じだ。

クソゲーの場合は「笑うほど面白くもないが、頭に来るほどバカにされてもいないという程度だ。でもいくら「人は働くためでなく楽しむために生まれてきた」と言うのが持論の私も、こういう時間とエネルギーの浪費の仕方は下らないと思う。「豆腐の角に頭を打って死ぬ」と言う下らなさに近い。

結局「下らない」とは「どうしてもなく意味がない」とか「どうしてもなく価値がない」と言う事象の、そのレアな故の珍しさからくる、ある意味常識を覆すほどの驚きと気づきが情報として含まれているということではないだろうか。

13、税金産業

今天下の東芝が轟沈間際だ。一言で言えば沈むか沈まないかは、何らかの形で国の税金が注入されるか否かだ。注入されなければ即轟沈すなわち終戦で、東芝の名前は近代工業史にしか残らないことになる。

東芝の凋落の大元は不正経理・粉飾決算であり、これ自体がホリエモンと同様に実刑に処せられるべきだ。だから轟沈に何等の同情の余地もなく、もし税金注入があればこの上ないモラルハザードだ。だが残念なことにそのような例は過去にも山一特融とかがあったし、米国ですらリーマンショックの時に救済された会社があった。

しかし他方で、東芝に仮に不正経理がなかったとしても原子力に社運を賭けた時点で、しかもその時点で東電福一の爆発はまだであったのに、もはや敗戦は約束されていたという指摘もある。福一爆発前から「原子力はペイしない」、これが世界の常識になりつつあったからだ。

瞑想録(その20)

東芝は、「世界世論を原発推進に変えてしまえば良い」というありえない妄想と「チャレンジ運動」と言う超精神主義に立脚して、原発路線をひた走った。これらはそのままに、「大東亜共栄圏」と「一人十殺」であり、かつての大日本帝国の敗戦の再演に過ぎない。日本人が先の敗戦に何も学んでいないことの典型例である。

ところで東芝の轟沈についてシャープと三洋も先例として、重電構造不況論も言われている。仮に構造不況だとしても嘘つきが始まりの東芝が少しでも許されるわけではない。だがこの構造不況の大元として、「大親分」格の「電力とNTTと言う2つのメガ独占が没落した割を食った」という見方がある。

つまりこれらのバカ殿たちから自動的に回ってくる潤沢な固定割当金が無くなって、「護送船団方式が消えたから没落した」という見方である。これは一面で当たっているだろう。10年前の小泉改革の時には銀行の護送船団を辞めたせいで、十二都銀と言われていたのが今や3メガバンクだ。それも青息吐息で、最早お義理でも電機メーカーを救えない。

この失敗に学習するならば、企業再生と継続の最も確実な手段は、かつての電力やNTTのような「自動集金機構」にコバンザメをすれば良いという結論になる。そもそもそば屋とかクリーニング屋とかをやってみると分かるが、掛けそば1杯の金を取るのだってとても大変だ。「麺が伸びていた」とか「シミが落ちていない」とか文句タラタラを潜り抜けて、やっと数百円なのだ。

だがこの自由主義経済の時代にそんな苦勞せず、「放っておけば毎日数億円も自動的に勞せず金が入ってくる」ようなお目出度いところがどこかにまだあるのだろうか。それがある。一番大きいのは税金を管理する国だ。さらに国から自動的に補助金が落ちて来る独立法人も含む。そしてそれに次ぐのが全農(農協)等の独占組合である。

分かりやすく言えば「これからも安泰な会社」とは、自衛隊の船舶や装備を作っているような会社だ。典型的には護衛艦と潜水艦、1隻約500億円だから通常の貨物船やタンカーの10倍も儲かる。しかも寿命は一声25年、つまり四半世紀もすると自動的に退役してくれるので、注文は未来永劫に約束されている。これはおいしいビジネスだ。

なぜおいしいか、その第1の理由は今言ったように大型の注文が途切れることがないからだ。だがそれに負けない第2の理由は、発注も検収もすべて国で、国の役人は2

瞑想録(その20)

年おきに転勤しつつ出世するのが本来業務なので、船や武器の細かいこと等およそ分からず、また分かる必要もなく、メーカーの言うなりにつじつまだけ合わせて、言い値で税金と言う他人の金を支払ってくれるからだ。

もっともこの「役人天国」特に「国防天国」は、合理主義の国のアメリカですらそうだ。企業や民間研究所は商務省やエネルギー省よりも国防省の仕事の方が、「国防はコスト無視で青天井だからなあ」と、何とか国防関係の仕事に食い込もうと必死である。

先日私はとある護衛艦と、自衛隊ではないが海洋の研究をする国の研究機構の探査船に試乗させてもらった。特に探査船は学術分野なので国際協力が国是であるが、そこに艤装されている種々の測定器、X線スキャナーとか炭素年代測定装置とか、どれをとっても日本のメーカーが作れるものなのに敢えて世界にばらまいて発注して、性能が悪くて使いにくいようなものをバカ高値で買っていた。

その極まったのが動力としての船用エンジンと船内発電機なのだ。説明員も「うちのエンジンは特注なのですよ」などと自慢していた。特殊探査船でもことエンジンを特注にする必要など全くない。これはむしろメーカーに騙されて、開発してみたが売れずに型式認定すら受けていないようなエンジンをまんまとここに積み込まされて、開発原価の元を取られているのだ。そして所員である説明員すらこの裏に気づかずに、平気で自慢している。発電機に至ってはその辺の水力発電所ほどの出力の発電機を複数個搭載していた。メーカーはそれこそ笑いが止まらないだろう。

続いて農協、ほかにも農水省系を中心に水産組合とか林業組合とかがある。これらが戦後の「隣組」的な付き合い重視の非効率経営をしていること、その非効率性はおそらく国以上だろう。もちろん採用はすべて縁故だ。バカ高い段ボール箱とかを「先代からの付き合いだから」と言う理由で、ヤクザまがいに取引したりしている。農林中金などアングラマネーの典型だ。

最近自民若手の小泉進次郎さんがこれをやり玉に挙げている。原発は不経済と国に逆らって「裸の王様」を始めた父親で元総理の純一郎氏の指導があつてのことだろうが、相手も生活が懸かっているから必死だ。返り討ちに会わねば良いが。

あとのねらい目は地方自治体だ。予算自体は小さいが、ほとんど同じものをたくさんの自治体に売ることによって十分に元が取れる。図書館蔵書管理システムとか上下水道システムとか緊急時避難計画とかだ。これからはもっぱら補助金ビジネス、これ以外考えられない。

14、どういう人が助かるか

私は最近に、ゾハル・バルハフティク氏が書いた「日本に来たユダヤ難民」という本を読んだ。ちなみに本の原題を直訳すると「難民と生還者」で、こちらの方が内容を良く表現している。著者の名は日本ではあまり知られていないが、「6千人の命のビザ」で有名な杉原千畝さんに「ビザを書いてくれるように」頼んだ、ユダヤ人の交渉団長だった人である。

この本の読後感は別途紹介するとして、本日は「私はなぜこの本を読んだのか」、その動機から話を始めたい。私は学生時代にイスラエルからの留学生の友人がいたこともあって、杉原千畝さんの事績については昔から知っていた。彼について最近では唐沢寿明さんの主演で、昔は加藤剛さんや反町隆史さん主演で何度か紹介されているので、多くの人がご存知だと思う。

杉原さんは人道の見地から本国の訓令に反してユダヤ人に日本の通過ビザを書き、領事館が閉鎖になった後も帰りの列車の中で一人でも多くの人にビザを書き続けたという。ただしビザを書くのはそもそも時間がかかることで、押し寄せた数万のユダヤ人に対して書けたビザは千家族6千人程度だったという。

だがこれでも当時のユダヤ人の他の脱出ルートに比べれば、1桁多いのである。それでも「書いてもらえた最後の家族」と「その次に並んでいて書いてもらえなかった家族」が居るはずだ。そして私の昔からの根本的な疑問は、これら相並ぶ二家族のその後の運命である。

多分「たった1番違いで大違い」だったことだろう。しかもこれら二家族に「前者の方がより立派な人だった」とか、そういう順序はないだろう。だとするとこの「1番違い」は、実に恐ろしい偶然だ。そしてもし偶然が世の中を支配すると言うのなら、普段どういう行動なり態度をとるのが良いと言うことになるのだろう。

今回の本はこの辺の経緯についておそらく、ありうる限り一番詳しい本だ。少なくとも残された家族について、汽車が出てしまった杉原さんが知るはずがない。だから彼らについては仮に杉原さんの手記を読んだとしても、当然に載っていない事項だ。

瞑想録(その20)

この問いについては残念ながら、今回の本にも追跡調査などはなかった。だからある程度予測するしかない。本によると杉原さんにビザを書いてもらった人はほとんどが日本経由で米国、パレスチナ、上海と言ったところに逃げおおせている。

他方間に合わなかった人々については、本にも具体的な言及はない。だが当時リトアニアに逃げたポーランド系ユダヤ人は最終的にそのほとんどが、ドイツ側に捕縛されて強制収容所送りか、ソ連側に捕縛されてシベリア送りになっているので、おそらく不幸な結末を迎えていることだろう。

この本によるとそもそも、「日本経由の脱出ルート」を本気で信じている人が少なく、日本領事館に押しかけたユダヤ人は難民全体に比べれば少なかったという。どの国の領事館もビザの前提として名簿の提出を求めているが、使われ方が分からない。提出先のちょっとした違いで、一方はビザをもらえ他方はシベリア送りになったりしている。結果的に名簿記載を嫌がって逃げ遅れた人も大勢いる。

またシベリア送りになったが運よく生き延びた人たちの生存率が、結果的には一番高かった。その中には後にイスラエル首相になりノーベル平和賞までもらった、メナヘム・ベギン氏も居たという。つまり「シベリア送りのおかげで助かった」という皮肉な逆転もあったのだ。

さらにユダヤ教の神学校の教授や生徒たちは多分に、「神に任せる」と言う態度で逃走の努力をしなかった。そのためにいわば聖典に忠実な結果として、多くの優秀な人々が抹殺されたという。バルハフティク氏は正義の人ではあったが、それでも「身分保障書を偽造する」程度のずるはやむを得ずしたと告白している。

さらにこの人は正義の人なので本当の裏社会については何も知らないようだが、中には金やコネを使って出し抜きの嘘で固めて逃亡して助かった人も居ることだろう。もちろんさらに、悪い現地人に騙されて落命した人も居るだろうが。

こう概観してみると、危機に直面した時に助かる「絶対的な方法」と言うのはないにしても、①情報をできるだけ多く集める、②情報の真偽について分析する、③最後は賭けであるが確信の高いところにいち早く手を打つと言う、この手順で助かる確率は上がりそうだ。あとは運だ。

非線形数学に「パイコネ変換」と言う変換がある。要するにパイの生地をこねて伸ばしていき、①伸ばす、②折る、この何十回の繰り返しの内にいつのまにか①隣通しが

瞑想録(その20)

遠くになり、②遠くだったものが偶然に近くなって、まるで予想がつかなくなるというモデルである。私が今回の本を、先に挙げた問題点に注目して読んだ結論は、「助かるか否かは多分にパイコネ変換だ」と言うものだ。

ではその中にあって少しでも確率を上げるための、①要領や立ち回りの良さ、②裏情報取得の巧妙さ、③運を引き寄せる強引さ等が「私にあるか」と自問すると、これが全くない。学生時代のサークルでもきれいな子は都会生まれのちゃっかりした奴が持っていたし、会社でも情報通の調子の良い奴とは正反対でいわゆる出世はない。

だからもし私が当時のユダヤ難民だったら、十中八九ドジで抹殺されていたことだろう。そして逃げ延びた人たち、彼らは決してより善人でもなければ実力者でもなかったが、その彼らの集団によって「イスラエル国の2千年ぶりの建国」と言う奇跡がなされたのである。

基本的には、「敵に口を広げられてから初めて逃げようと言う時点ですでにアウト」だ。この点は尼崎連続殺人事件の角田美代子から得られる教訓として、既に記した。だが世界中にネットワークがあり小回りの利くユダヤ人ですら、この時は敵に口を広げられてしまっていたのだ。そしてほとんどが強制収容所で抹殺された。

私はこの2年、平均して週に3冊の本を読んでいる。同じ記録でも、本は絵に比べて理解するのに格段の時間と努力が要る。その時間と努力に見合った利益が読書と言う行為に存在しているのか、いまだにその確信はない。つまり私にとって読書はまだ、趣味でも習慣でもない。それでもせっかく得た教訓は生かしたいと思う。

振り返ってみると私の読書、つまり一生と言う限られた時間を本に充てて他の可能性をその分減らすという選択肢、その読むべき本選びの最大の基準は「如何に嵌められずに生きるか」にあるように思う。私に生への執着は余りないから強制収容所は仕方ないにしても、他人の食べ物や踏み台にされたくないのだ。

15、貼り紙考

貼り紙とは紙にマジック等で書いて壁等に貼った、一時的な注意書きのことである。普段はあまり気にしないものの、気にしてみるとこれが結構に文化の一面を表している。

瞑想録(その20)

貼り紙は一般的に言って美観を損ねる。壁の模様を中断するし、たいていは乱雑な手書きだ。その構造物を作った時に貼り紙に書かれた注意事項に気づかなかった事が、人類の知恵の限界を露呈している。「出口」とか「入口」とかそういうものは建物の構造上決まっているのだから、建設時に石にでも掘って埋め込んでおいた方がはるかに見栄えがする。

そう言う私の居住するマンションも、「この敷地内は通り抜けできません」とか「ゴミはできるだけ奥の方から置いてください」などと言った貼り紙が、ほぼ恒久的に貼られている。どちらも最初から気づける注意だし、特に前者などは「このマンションは通り抜けできますよ」とわざわざ教唆している面すらある。

もちろん明白に一時的な掲示も多い。例えば「明日引っ越しがあります」とか「青色のTシャツが落ちていました」とかだ。そのためにわざわざ掲示板と言う大きな板が、これは建築時から恒久的に設置されている。大学の掲示板の「〇〇先生休講」みたいな掲示は、その典型だ。

先日図書館に行ったら郵便ポストの下に、「これは本返却ポストではありません」と貼ってあるのに気付いた。そう言われてみると本物の本返却ポストと似ていて設置場所も近く、中には間違って本を返してしまう人や、悪質になると面倒なので間違えたふりをしてその口に本を投げ入れて帰ってしまう人も居るのだろう。まあこの混同まで「設計設置時に気づけ」と言うのは、さすがにちょっと無理だ。

この例で思ったのだが、貼り紙の警告や注意には、「何らかの混同の蓋然性があるそれを防ぐ」ためのものが多い。つまり類似である。類似の判断には商標法に基準があって、①外観類似、②称呼類似、③観念類似の3類型が規定されている。今のポストの例は商標の基準に照らすと「外観類似」だ。商標の例では「餃子の王将」に対して「餃子の玉将」と作る場合がこれに当たる。

他の類型について貼り紙を例に見てみると、称呼類似の例としては「こちらはコジマ電機であってノジマ電機ではありません」と言うのが考えられる。さらに観念類似としては、「こちらは星製菓であってスター製菓ではありません」と言う例が考えられる。ただし商標は世の諸事象の1つに過ぎないから、特に混同が問題になる分野だとは言いながら、世の混同がすべてこの3類型に収まる訳ではない。

「間違いよりも気遣いを」、「出たい人より出したい人を」、「アラブはアブラを売りなさい」、「クスリにはリスクがあります」、これらの例はいずれも称呼類似を逆手にとって、

瞑想録(その20)

気の利いた警句的に注意を促す例だ。別の例としてわざと小さい字で「これは個人の感想です」とやるのがある。宣伝のPVに良く使われる注意書きだが、非常に言訳がましく、見落としや思い込みによる錯誤をあえて狙っている、商標にはない類型だ。

いずれにしても貼り紙や注意書きにはその機構に混同があり、混同すると言うことは何らかの面で似ている、少なくとも似ている面があると言うことだ。以前に脳内の意味認識の所で、「近いものは位相で、遠いものはネットで連結されているのではないか」と言ういわば「二段構造論」を指摘したが、その通りだとすると複数の対象物について「似ている面がある」と言うことは、「①似た面については位相で、②違う面についてはネットで見る」と言うことになる。

例えばアラブとアブラは、その①音や②産油国だという意味で二重に似ている。だが例えば「ヨルダンと有機化合物」と言う面で切るならば、何等の類似もない。郵便ポストと本返却ポストの例も、物の受け取りと言う①機能及び②形状により建物外部から見れば似ているが、建物内側の受け取り部分を見るとまるで形が違う。

さらに別の例として「バリカンと草刈り機」もその①形状と②機能は似ているが大きさや用途は全然違っている。これには類似な面と非類似な面が区切り良く併存している。類似の面は位相だから「どれだけ似ているか」を問うことができ、他方非類似な面は「違う=∞」のひと言しかない。数字からいきなり無限に飛ぶのだ。そして商標の類非判断が特許庁とその上級審である高等裁判所でしばしば違ってくることを考えると、この「質的なジャンプ」は簡単には言えない。

更に「清水寺に行くにはこの道が近いです」と言った親切の貼り紙もあるが、実はこれが特定の商店街に客を呼び込むための嘘だったとしたらどうだろう。何が類似しているかと言うと複数の道で、これは外見類似か観念類似か。だがこれが本当でないとすると商標無効の審判で取り消されるケースだ。

商標はその前提として、類似非類似を言う前に効能を誤認させる等の公序良俗違反の場合はそもそも登録されない。あるいは「ウォークマン」や「ウォシュレット」が危うかったように日常の普通語の域を出ていない場合も登録されない、つまり商標とみなしてくれない。

まあ商標にしても貼り紙にしても、「一見多種多様でありながら別のマンションにもたいてい同じものがある」など、人類とは意外とやることが似ていて、面白そう面白くない、変化や多様性に乏しい。貼り紙からそう言う面も見えてくるわけです。

16、AKB48と数字

AKB48と言うユニットがある。秋元康さんがプロデュースした若い子ばかり48人の大ユニットだ。「若い」が売り物だからメンバーは5年もすると、「卒業」と称して入れ替わっていく。つまり5年後にはユニット名こそ同じでもメンバーは全員別人なのだ。では、どこまでが同じ「AKB48」だろう。

この手のパラドックス(逆理)は西洋には昔から、それこそソクラテスのころからあって、「テセウスの船のパラドックス」と呼ばれている。元の逆理はこうだ。「船がある、壊れたところから取り換え修理していったらついに全部新調された、ではどこまでが元の船だったか」。

東洋人にはこの問いの答えは明白であって、「船は徐々に違ってきて最終的にまるで違うものになった」である。理屈偏愛の一神教の西欧人が犯しやすい、「連続的な物をあえて2分しようとする」行為がそもそも無理筋なのだ。ある先生は、「二分法は愚か者の思考法だ」と言っている。確かに人種差別も元は二分法だ。

だから最初のAKBも徐々に交代したのであって、「どこから」とことさらに問われれば「1人変わればもう違う」とか「大好きな子が卒業した時点で別物」とか「永遠にAKB」と言う人も居て、それこそ10人居れば10通りの答えが出てくるだろう。

ところで最後の「永遠にAKB」と言う人に聞きたいが、女の子が1人卒業するごとに、若い女の子ではなくて犬が新たに入ってくるとしよう。こういうシステムだと5年後にはAKBは犬のユニットになっている。それでも永遠にAKBだろうか。こう考えると意外と難しい問題を内包していることが分かる。

要するに、「船と言う連続物に数字と言うデジタルを当てはめるのに根本的に無理がある」のだ。AKBの例で言えば、全員変わった時点では別物、あるいは数字でないから ∞ (無限)と考えると良い。ただしこの数字列は従来の数学で習う数字列と異なって、「有限回の尺取りで無限に至る」ことになる。しかも「 $\infty - 1$ 」とか「 $\infty - 2$ 」と下に下れて、下から上がっていく1, 2, 3とどこかで行き会う。こういう無限は、従来の数字や数学ではありえなかったものだ。

従来の学校で習う数学では無限は、「永遠に到達できない存在」だった。ここに一神教の絶対神を、典型的に見ることができる。つまり現行の数学はさも「中立不偏の絶

瞑想録(その20)

対真理」であるかのように教授されているが、実は欧米流の一神教哲学が巧妙にはめ込まれ刷り込まれているのだ。

ところが東洋のあるいは西洋でも人工的な一神教が征服する前の素朴な多神教やアニミズムにおいては、神は多数しかも人の隣に居て場合によっては結婚すらするし、スサノオのような乱暴神もいた。こういう宇宙観はむしろ、今AKBで見たような「数字」になるのではないか。

AKBの場合は単位が1人だったから西欧数学に近い面もあるが、そして整数論だから実数とか無限小の極限とかは考えられないが、船の場合は考えられる。いくらでも大きくあるいは小さくもできるし、部分の切り取り方も無限通りある。それでも本質は数字や二分法ではなくて、「徐々に遷移する」ことに変わりはないし、無限も有限回の尺取で至るものなのだ。いやむしろ連続体の本質として、「回数」にはほとんど意味がない。

つまり東洋哲学的な「数字」とは無限と言っても超越しておらず、多分に個々と肩を寄せ合って、並立していて手が届くような存在なのだ。無限大の反対の無限小も全体ではなくて部分ではあるが、その質感は「小さな無限」である。

まあこれは原始人の「1, 2, 3、あとはたくさん」に似ている。ここに足し算は部分的にあるが掛け算はない。だから位取りもなければ微積分のような高等数学も、少なくとも従来の数字のまねでは出てこない。西洋の超越神数学の細分主義はそのおかげで科学が発達して病気も直せるようになり戦争にも勝てた。だが東洋の直感主義でないと感得できない境地だってあるのだ。

学校の数学はあたかも「唯一無二」のように教わるけれども、特に無限大と無限小と言う連続体やアナログがかかわるところでごまかしをして逃げている。「どれだけ大きな(小さな)数字を出してもそれより大きな(小さな)数字がある状態」とは、きわめて姑息な定義だ。

これを「姑息とか不自然とか人工的」と思わない人は、数学や物理学を専攻すると良い。但し哲学として徹底するのなら、併せてキリスト教やイスラム教に改宗すべきだ。他方でこの無限の定義になじめなかった人も多いことだろう。それはその人の罪でも愚鈍でもない。単に一神教が肌に合わなくて、信仰する気になれなっただけなのだ。欧米での矛盾は、東洋では道理と悟りだ。

だからそういう人は数学や物理を専攻しないでおくか、あるいは願わくは多神教やアニミズムに即した別の数字や数学の体系を作るべきである。そこでのポイントは「完全包括性」とか「絶対無矛盾性」を願わないことだ。信仰においても、こういう項目にこだわりやすい極端な性格の人が、学生運動や共産主義に走るか一神教に改宗していく。

17、条件反射

話を聞いたり本を読んだりなどした後であるいは途中でも、「面白い」とか「下らない」とか「分かったぞ」とか「なるほど」とか、あえて考察過程を経ることなく瞬間的にある意味条件反射的に出てくる、一連の「感嘆詞」がある。

他にも「やった～」とか「すごいぞ」とか「笑えるね」とか「どうでも良い」とか「つまらない、もう良い」とか「へたくそだ」等結構数十くらい、この手の感嘆詞はある。これらの感想は話自体が結構長くて入り組んでいたとしても、なぜかいつもほとんど瞬間的に出てくる。

そしてその感嘆の理由を改めて聞かれると、これもなぜか考え込んでしまって時間がかかる。なぜこれらの感嘆詞は他の感想や意見と異なって、瞬間的に出るのだろうか。これらだって判断の一種と言う意味では通常の感想と変わらないだろうに。

第一に気づくことは、これらの感嘆詞が自己保護本能と近いところにあるということだ。良く例に挙げるが、「黒と黄色の縦縞を見たら人も動物も瞬間的に逃げる」と言う法則がある。逃げて安全を確保した後でそれが虎でないことについて時間をかけて確認する。もし逃げる前に考え込んでいると、それが虎なら食われてしまう。

そして「つまらない」とか「下らない」とか「ありえない」とかは直接生死や安全にかかわることではないけれども、その感情の原始性によってやはり基層の「基本ソフト」に近いところに組み込まれているのではないか。これはあくまでも仮説であるが。

もう一つの特徴は、これらの感嘆詞を惹起する対象は「普通」ではないということだ。単に普通でありふれているならば何の感想もないはずだから、面白くもない代わりにつまらなくもない。だから何らかの感想が出ると言うことはすなわち、普通ではないということなのだ。何らかのアラートつまり一種の警告である。

瞑想録(その20)

そして普通でないと言うことはつまり、現在対象の話と一般に想定される普通の話の間に差があり、仮に個々の話は長くてもこの「差ベクトル」が端的であるために、人の脳にいわば条件反射的にアラート信号が発せられると想定できる。

その意味でこれらの感情が発生したと言うことは、その「長い話」に何らかの情報価値があったと言うことだ。その価値は正かもしれないし負かもしれないが、いずれにしろ少なくともその人個人には価値のある情報があって、かつその長い話から感嘆詞の意味での要点を端的に抽出できたと言うことだ。これは実は偉大な才能である。

一般に情報の価値は多分に、その個人の価値観や趣味や人生の経緯に強く依存する。隣家の猫の体調も一つの情報だが、猫に興味のない人にとってその情報価値はゼロ、あるいは知りたくもないという意味ではマイナスであり、他方その猫を飼い主よりもかわいがっている人にとっては重大情報だ。受験戦争に勝つコツは、どれだけたくさん覚えるかよりも、余計なことをどれだけ覚えなかったりする。

では逆に「情報価値は個人的な尺度しかないか」と言うと、そう言うこともない。もし情報が全く個人の属性でしかないならば、学校の教科書で何を教えるかなど誰も決定できないはずだ。だが現実には教科書や指導要領等があると言うことは、個人とは離れて一般的平均的な意味での情報価値もあると言うことだ。

そして共通価値の根源はおそらくここでもやはり、①本能と言う自己保存要求やその元の危険の種類が個体に依らずほぼ一定であるとか、あるいは②後天的に獲得した体験でもその社会あるいは人間一般の体験に多分に類似性があるために個人価値とはいももののそれらが類似する傾向があると言うことだ。これらが「常識」と言われるものだ。

さらに「情報と経験の個人差の微妙な関係」を示す例も挙げられる。すでに知っている情報と同じあるいは似た情報が与えられたときに、人はある場合には①「もう十分だ」と判断して断る。だがその関係のちょっとした違いで「もっと知りたい」と言う動機が働けば、②「それなら重複部分があってもあえて聞いておこう」となる。これらの差は実はほんのわずかなのだが、出る態度の方は正反対である。

もっと端的には「トリビア」がある。トリビアとは一言で言うと「価値のない情報」である。例えば「石川啄木は借金魔で回りから嫌われていた」などと言う情報だ。これも面白いと思う人には価値があるかもしれないが、普通金や点数にはならない。ただしトリビアでも山ほど集めると本にできて結構売れて金になるのだから、情報価値の測り方

瞑想録(その20)

は難しい。荒俣宏さんの「帝都物語」などは、トリビアにストーリーをつけて有価物にした典型だ。

しかも成果が高い程、しばしばその認定にリードタイムがかかる。石川啄木も宮沢賢治も生前は「鳴かず飛ばず」だった。芥川賞作家の西村賢太さんやねじめ正一さんの前半生はそれこそ無駄の塊で、もし作品を残す前に死んでいたら単なる石潰しで終わったことだろう。さらには日本の古典の和歌に見られるような「秘すれば花」のような事象の情報をどう測ったら良いのだろう。

「情報」と言う語の守備範囲が正当に広がったおかげで、これについて哲学的に考えるチャンスと必要性が、グーンと広がった。

18、夢と解釈(その12)

<夢1>レストランに入っていると大声が聞こえたので行ってみると、うちの娘(なぜか男)と運転手風のつなぎを着た若い兄ちゃんがトイレの前でにらみ合っている。そして兄ちゃんは顎から、娘は額から、血を流している。どうやら出入りざまに思いっきりぶつかったらしい。私は間に割って入ると2人をなだめて、公平に話を聞こうとした。すると嫁さんが駆けつけてきて、「うちの娘に何をするの」と感情的に叫ぶので、収まる話も収まらなくなってしまった。

<解釈1>この辺の落ち着きとか感情のもつれとか、いかにも現実にもありそうです。

<夢2>地元のあるホテルを会場に、「白物対決」と言う企画があった。どうも「大山豆腐と小田原蒲鉾のどっちが美味いか」と言う味比べのようだ。ところが舞台裏ではまるで素人の私が、豆腐を壊したりとか蒲鉾を落としたりしながら、へたくそに飾り付けをしている。いざ本番と言うことでTV局と黒岩知事と審査員の女性2人が入ってきた。知事は「豆腐が美味いね」と言う。だが女性審査員の1人が「こうやって食べるのよ」と言いながら、ケチャップとマスタードを山ほどかけて食べ始めた。もう1人の女性が、「それじゃあもうサルサドッグね」とあきれている。

<解釈2>何と言うかもうめちゃくちゃです。ちなみに横浜市では黒岩知事の存在感は薄い。それと私はサルサドッグが大好きです。

<夢3>会社の研究所長の姿が見えない。研究員上がりの人間力のない人だ。現場たたき上げの副所長が電話で誰かに、「所長だったら来ませんよ、ええ来週も来ません」と断言している。ところがその所長が病気でも火事でもないのに、担架に運ばれて

瞑想録(その20)

やってきた。寝返りも打てないほど幼児化してバブーバブーとか言っている。さすがの私も「これはやっぱりダメだなあ」と思うだけだった。

＜解釈3＞この所長様のモデルは実際に居て、現業部門の平社員にもバカにされていました。ちなみに私も研究開発職でしたが、専門バカではなかったつもりです。

＜夢4＞町内会のイベント準備に参加している。ジャイアンみたいな奴に言われて、彼のためのカラオケステージを設営している。私はどうも「のび太」のようだ。しずちゃんや女の子たちは、披露するダンスの練習をしている。そのうちジャイアンに強制されて、スネ夫と3人で賭けをすることになった。私が勝ってラーメン1杯を当てたが、なぜかジャイアンに取り上げられなかった。

＜解釈4＞本当の私はどんな小さな賭けでもしないのですね。なぜかドラえもん本人は出てきませんでした。

＜夢5＞私はライナートラックの運転手だった。品物を届けて会社に戻る途中で、助手席にはなぜか嫁様が同乗していた。景色がいろいろ変わって、運転していて楽しい。ところが途中でエンジンの音がおかしくなったので、最寄りの修理工場に入った。そして修理の間なぜか我々は、小料理屋に居て気楽にやっている。そしてしばらく楽しんだのちに、切符を買って車で帰ろうとしている。トラックはどうなってしまったのだろう。

＜解釈5＞ライナートラックの運転手は昔からなりたかった職業です、定時に届けられさえすれば良くて管理がなさそうなので。

＜夢6＞昼食後眠くなってちょっと布団に入って、起きていくと娘が見たことのある袋麺を作っている。聞くと私が寝ている間に私の枕元にある「食糧庫」をかき回して、自分の昼食用に乾麺の大袋を破って持ち出したらしい。ふつうそこまでごそごそやれば気付くだろうに、私は全く気付かずに熟睡していたようだ。

＜解釈6＞熟睡していて夢すら見ていなかったのですよね。

＜夢7＞近所に金持ちの子弟が集まる学校ができたので、その文化祭に行ってみた。色々な催しが出ていたが、その中に「無料食べ放題」と言うコーナーがあった。もうすでに結構な人達が集まっているが、この「ただ分野」は私の最大得意科目だ。ウオーと飛び掛かって、パンだろうが寿司だろうがラーメンだろうがチャーハンだろうが次々に食べつくした。もうお腹がパンパンでとても動けない。

＜解釈7＞起きてみたらやはりお腹が張っていましたが、こちらの原因はガスのようなです。ちなみに昨晚のご飯が足りなかったとか言うことはありませんでした。

＜夢8＞会社の中庭の芝生の上になぜか今日は、「ポケモンキオスク」が来ている。「スマホをかざしてボタンを押すとレアなポケモンのガチャポンが出てくる」という出店だ。スマホを操作するだけで、超レアポケモンの「レキー」がゲットできるという。早速キオスク内で操作ボタンを押そうとしたが、ボタンが多すぎてどのボタンか分からない。破れかぶれに乱打したが、結局時間切れだった。もう一度やってみたが、再度ダメだった。

＜解釈8＞単なる「見せチャンス」のようにも思えるのですが、本当にもらえるものなのですかね。ところでこの間仕事はどうしていたのでしょうか。なお、「レキー」と言う名のポケモンは居ません。

＜夢9＞私は学生だ。サークル活動が終わった後のこと、「みんなでポットラックパーティをやろう」と言うことになって、色々な食べ物や飲み物の買い出しに出た。するとある者がウイスキーとかテキーラとか、強い酒を買ってくる。「女の子が悪酔いしなければ良いが」と心配になったが、その悪い予感が的中してしまった。

＜解釈9＞こういう「事件」、学生の時に実際にありました。その時は本当に困りましたね。

19、「日本にきたユダヤ難民」を読んだ

本書は1948年のイスラエル国独立に立ち会い後に宗教大臣を12年も務めたゾハル・バルハフティク氏による、先の大戦前後のユダヤ人迫害と救済に焦点を当てた自伝である。この本の原題を直訳すると「難民と生還者」で、こちらの方が内容の全体像に近い。

著者はポーランド系ユダヤ人で、ゾハルと言う名前は直訳すれば「輝夫君」となる。この人は日本では著名と言う程ではないが、「6千人の命のビザ」で今は著名になった杉原千畝さんにビザを書いてくれるように頼んだ、その時のユダヤ人の交渉団長だった人である。

まずユダヤ人の世界史における位置から説明すると、ユダヤ人は2千年前にローマ帝国に国を滅ぼされてから流浪の民として世界中に離散し（ディアスポラ）、どこの国でも「招かれざる客」としてしばしば追放されたり迫害（ポグロム）されたりした。それでも祖先からの、元祖一神教であるユダヤ教を連綿と守り続けた民である。

日本は中東と反対側にある島国の為に、ユダヤ人が押し寄せることはなかった。そのために世界では希にユダヤ人アレルギーのない国で、それがこの著者をはじめ日本

経由でナチの手から逃れたユダヤ人達には幸運だった。ユダヤ人を敢えて例えれば、世界の国々にとっては在日や華僑のような存在だったのである。

私がこの本を読んだ元には、昔からのいくつかの疑問があった。すなわち、①なぜ大戦前のユダヤ人は自分の運命を裏から変ええなかったのか、②なぜ小国のリトアニアに多数居たのか、③獲得した少数のビザは内輪でどう分配したのか、④杉原ビザに間に合わなかった人々は結局どうなったのか、⑤杉原ビザ組は日本を通過した後どうなったのか、と言った問題である。この内④については以前の記事で記してある。

先ずなぜリトアニアだったのか。リトアニアはバルト3国の1つで、ポーランドとロシアに挟まれた小国である。ユダヤ人は一般に北系(ほぼヨーロッパ)のアシュケナージと南系(ほぼイスラム圏)のセファルディに分類される。この内アシュケナージはナチの迫害が始まりポーランドも併合されると、多くが事実上中立国であったリトアニアに逃れた。ロシアはボグロムがひどくて行くところではなかった。

こうしてリトアニアに一時的にユダヤ人が集中した。著者は元来弁護士であったことやイスラエル独立運動に参画していたこともあって、特に日本領事館交渉のまとめ役となったものである。なお杉原組がビザを獲得した直後に、リトアニアはスターリンのソ連に併合されてしまっている。

次に獲得したビザの内部での分配の問題と言う悩ましい問題である。杉原氏の6千通は破格であり、多くの場合は数十通とかせいぜい数百通単位であった。これは何十万何百万と居る難民にとっては、ほとんど焼け石に水だった。だが「無いよりははるかにましだ」と言う態度で臨むしかなかった。

そしてこのわずかのビザの配分法だ。これは結局のところ、「政治家から数名、宗教者から何名、経営者から何名」と言った形でまず分野別に割り当て、次いで各分野の著名な人から優先するという方法を取ったようだ。当然のことながら①割り当て方法に対する不満や②自分が不当に順位を低くされた等の不満は噴出したものの、結局「他にやりようがなかった」と著者は記している。

さらに次に日本の通過ビザをもらったラッキーな人々のその後である。彼らはその後にそのビザを根拠にロシアの通過ビザも獲得できてウラジオストックから船で敦賀に着いた。そして神戸や横浜に滞在したのちにパレスチナ、上海、アメリカと言った国や地方に渡っていった。ほとんどの人が生き永らえたようである。

ところで著者は責任者でありながらこのチャンスに、多くの同胞を残したまま自分は日本に逃げ延びた形になっている。これに苦情がないわけではなかった。ただ彼は逃げ延びたというよりは、「以後の活動はリトアニアの外で国際的にやったほうがより効率的だ」と判断しての行為だとしている。

最後に、そもそも現実的小知恵に優れて小回りが利き世界的ネットワークを有したユダヤ人が、なぜこうも安々とせん滅運動を許してしまったのだろうか。先に華僑や在日に例示したように、世界に散ったユダヤ人には富豪も多かった。富豪たちはもちろん難民ユダヤ人にできるだけ援助はしたのだが、所在する国の政府を裏から動かすほどの力にはなっていなかったということだ。

杜氏は特に世界のどの国においても、第一優先は自国の勝利と自国民の安全保障であった。よそ者であってそもそも歓迎していない、「居なくなってくれば問題が片付く」と言う位置づけのユダヤ人を、国を挙げて救おうなどと言う機運は全くなかった。自由の国の米国ですら救済に消極的だった。当時イギリスの委任統治下にあったパレスチナが、イギリスにとっても他人の領土だったので統治の気力が薄くて、何とか忍び込めたということだ。

結局尼崎連続変死事件の記事でも述べたが、事件と言うものは一度口をこじ開けられてしまうと、こじ開けられる前に比べて対策が著しく困難になる。先の大戦中のユダヤ難民問題も、この一例だということになる。もちろん彼らも一度懲りたので、現在の対策はより万全だと思うが。

ところで時代をこの時より40年ほど遡って日露戦争時、日本は戦争債を売ろうとしたがどこも買ってくれなかった。その時に米国在住のユダヤ人銀行家のシッフ氏が、「ロシアのボグロムに対抗するため」と称して大量購入してくれたことがあった。戦争後シッフ氏は明治天皇から褒章を受けている。この話がなぜかこの著書には出てこない。もし著者がこの事実を知っていたなら当然に、良い意味で利用したであろうに。

この本は一族を挙げてのポーランド脱出劇から始まって、戦後のポーランド再訪問で終わっている。彼らが居住していたゲットー(ユダヤ人居住区)は跡形もなくなって、また親せきや友人や著名人のほとんどが抹殺されていて、著者らは茫然自失したようだ。

いずれにしても私はこの本から、際どい時の危機管理を学んだと思う。

20、一神教徒の神への愛着

最近、「モサド前長官の証言」、「日本に来たユダヤ難民」とユダヤ人の本を2冊立て続けに読んだ。そしてそこに共通して貫かれている精神は、ユダヤ人の神に対する限らない愛着であった。

私自身は神道・アニミズムの強烈な信奉者であるので、これと対極にある一神教の神への愛着などにおよそ感情移入できない。出来ないしする必要もする気もないのだが、客観的に知っておけば本を読むときなど何かと便利なので、「いったいどういう感情だろう」と私なりの近似を試みた。

その結果分かったことは、自分にとってユダヤ教はおろか今話題のイスラム教やもっと身近にあるキリスト教ですら、彼らの「神を愛する気持ち」が全く理解できないということだった。バリバリの多神教徒で四季自然をこよなく愛する私にとって彼らは、およそ気が違ったとは思えない。

まあ客観的には、あの膨大な聖典のおかげで彼らは字を読むとか論理思考の訓練ができるわけであるから、ありがたいという理由があるのは分かる。また同信者同士でコミュニティを形成して信徒は優遇するから、生活上の便利や安全と言ったご利益があるのも分かる。

他方で一神教の場合は「異端は地獄に落ちる」と脅かされているから、その意味でこの「飴と鞭の統治システム」が巧妙な脱落防御なのも良く分かる。でも肝心の神様をあたかも「異性を愛するように愛着する」気がなければ、ユダヤ人のように「2000年さまよってもなお無くならない」と言うことはあり得ない。

日本人が「修行」と言うときに彼らは「バイブル・スタディ」と言うから、学習の要素は強いだろう。でも冒頭に挙げた本には、「先の大戦後に破壊されたシナゴーク(ユダヤ教会)跡で破られたトーラー(経典)を見た時には涙が止まらなかった」と書いてある。単なる利便のためだけならこういう感情が沸くはずがない。

実際にキリスト教の讃美歌には”Jesus ,how I love you!” とか、” Jesus loves me!” とかの短い文句をマントラのように繰り返すだけの讃美歌もある。だから彼らはイエスさんを本気で愛しているのだろう。だが2千年も前の本に書いてあるだけのおよそ会ったこともない人を、どうやったら愛せるのであろうか。あなたは卑弥呼を愛せるか？

そもそもキリスト教の教理によると、入信の前提は贖罪の観念にあるという。つまり「こんなに罪だらけの私をタダで許してくれる神様は本当に素晴らしい」という気持ちだというのだ。だがあの生来傲慢な欧米人が一度でもそんな謙虚な気持ちになったとは、およそ思えないのだ。

日本人の一神教徒は1%未満とわずかである。彼らの証を聞くと、「在来宗教では救われずにキリスト教でやっと救われた」という経緯の人が多く、確かに日本の在来宗教は「救いではなく悟り」であるから、そういう「落ちこぼれた人」は多少なりとも居ることだろう。でもそうだとしたら一神教は、単なるニッチビジネスだ。

と、ここまで来て思い当たった。私自身も神道を統括する日本の皇室をこよなく崇敬しているが別皇室の方々とことさらに言葉を交わしたことはない。と言うことはその間接性においては、一神教の経典經由の神への愛着と自分の皇室崇敬は大して変わらないとも言える。

私の好きな軍歌に「出征兵士を送る歌」という曲がある。「我が大君に召された〜るう」から始まって「いざ行け強者日本男児！」で終わる曲だ。ところがこれを、「我がアッラーに召された〜るう」から「いざ行け強者イスラム男児！」と置き換えても全く通じることになった。

と言うことは、私の皇室崇敬の気持ちと一神教徒の神愛着理解に類似な面があると言うことになる。推測するに一種の封建時代の、「御恩と奉公」や「ヤーさんの義兄弟」に似た感情だろうか。私が四季自然や滝山河を通じて染み入る心そのままに、八百万ではなくて「すべてを作り給った全能の神」に向かう。少なくともそのように、脳構造が方向づけされているということか。これ以上は私にはもはや推測できない。

冒頭に挙げた本に、小辻節三と言う人が紹介されている。この人は下賀茂神社の神官であったが、「どうも神は違う」と思い始めて一度はキリスト教に改宗した。だが三位一体の「神が同時に人」と言うくだりがどうしても「不徹底で嘘っぽい」と疑問に感じた。そしてなおも精神放浪して、結局ユダヤ教に改宗して落ち着いたというのだ。こういう理屈っぽい人が、あるいは一神教は向いているのかもしれない。

それにしてもムハンマドによるイスラム教の成立後、瞬く間にイランからスペインまでを征服してしまったあの熱情は一体何物なのだろう。一神教は一般に伝道熱心ではあるが、それだけではあそこまでの爆発的拡大は説明できない。

そこで視野を広げて、マルクス主義とか創価学会とかナチズム等を広義の宗教に含めてみた。これらの主義主張も今でこそ衰退気味ではあるが、「創成期には野火のごとく教勢が拡大した」点ではイスラム教と同様である。そしてこれらが急拡大したのはこれらの「宗教」が、当時の時代が閉塞的状況にあったところに、これを打ち破る天からの光明に見えたからだろう。

アラブ世界もムハンマド以前は、部族単位の半農半牧の貧しい人々であった。だからイスラムの教えが現れるやこれが光明のごとくに光って、一致団結して熱情となったのであろう。そういう意味では今のイスラム国(IS)も、ムハンマド時代のリバイバル運動と見なせないこともない。なお現在「幸福の科学」だけが勢い盛んなのは、今まで手付かずだった「もう少しインテリ富裕層」に攻勢をかけているからだろう。

最後に一言加えたい。あるキリスト教の外人伝道師が、「一神教は attachment であり多神教は detachment だ」と要約していた。この用益要約はなかなか良いところを突いていると思う。欧米人はイエスさんにくっついていないと不安になるし、他方我々は「執着を外す」のが悟りだ。

半世紀前に欧米でヒッピー運動が盛んになり、そして流産した。この運動には東洋思想が大いに影響を与えている。ただ残念なことに欧米人は detachment を、「何もしないこと」ではなく「何か別のことをすること」としか理解できなかったために流産したのだと感じる。しないことの方がすることより困難なのだ。

実際に行動と執着は同義である。これと同じ意味で、私には執着はないので、一神教は必要ないし理解もできない。

21、モチーフ理解と波動

先日の瞑想で、「数字理解を基本としている現状では、波動についての理解は不十分であること」を指摘した。特に一般に波動と言うと三角関数や二階の微分方程式しか連想できない人がほとんどであるところ、波動とはもっと広く「あらゆる情報やエネルギーの伝播手段」と理解すべきであることを喚起した。

つまり外的な物理波動についても、数式で表現できない言葉領域にしか落ちない存在もあれば、もっと広く「この宇宙(有次元線形空間)では描きようのない高度な波動」

瞑想録(その20)

もある。特に情報の意味を「無体の価値」と広く取るならば、情報の伝達は多分に波動に依っていることになる。

ここでは特に自然の前に、人の作った芸術について見てみよう。絵画、彫刻、文学、音楽等その媒体や様式は様々ある。そして受け手はその媒体の態様に応じて、媒体から情報即ちモチーフを得ようとする。ここでは一見、「絵画と言う絵の具の混合具合が人に情報を提供している」かに見えるが、情報と波動の真の発信者はその絵画の制作者である。

つまり人の脳波が直接波動として伝播できればそれが理想なのであるが、そしてデジャビュとか人の視線を感じるとか多少はそういう能力もあるものの、特別な霊能者を除いてそれはでき得ない。そもそも脳波動を直接交信できたとしても、発信者と受信者の脳のトポロジーは同じとは限らないので、その波動が正確に復号されるかも保証の限りでない。

いずれにしろこれらの事情によって、人の考えは文字や絵等の媒体を一旦経由して、間接波動としてでないと伝わらない。そしてここでの波動を正弦波のように「図表に描いて見せてくれ」と言われても、4次元時空に収まるはずもなくおよそ描けないのだ。3次元に収まる物理波動に話を落とせばあるいは可能かもしれないが、落ちすぎてつまらない。今はアナログ波を論じており、真のアナログのその態様はおおよそ画面に図表化できない。

いずれにしても、今の議論の理解のキーワードは波動である。人が絵を見るとき最初の印象は「色や形の漠然とした分布」である。それを基に受け手の人の脳は当てはめや直感を使って、その絵が訴えたいモチーフを抽象するに至る。そしてそのほぼ抽象できた段階で、発信者の発振器と受信者の受信機は実質同一の波動で共鳴して直結する。

ここでモチーフのレベルにも色々あって、その個々の絵画に固有のモチーフもあれば、もっとメタの「その画家らしさ」もある。いずれにしても重要なのは理解した瞬間であるが、その時の理解はレベルに依らずいずれも波動の共有に依っている。それらの波動同士には何らかの演算が介在して上下関係を形成しているのであろうが、その演算は今のところまだ知られていない。

瞑想録(その20)

ところで従来のデジタル数学はその大元が、足し算と掛け算と位取りにあることは以前に見たとおりである。そしてこのデジタル数学が発見した極め付きの優れ物に「関数」がある。なおここで関数とは、それが解析式で陽に書けることを要求しない。

一般に数学の数学足りうところは、何らかの繰り返しがあることだ。幾何の相似関係や線対称等の対称性、あるいは群論の交換不変性はその典型であり、「幾何の背景には必ず群がある」と言われているほどだ。そして関数の場合も、「個々の点に捕らわれずに広く同じ形で表現できる」ことがその肝要であり、この「同じ形」が即ち繰り返しであって数学である。

さてここで思考実験をしてみよう。2次元グラフ、例えば「 $y=0.33x^2$ 」を考えてみる。二次関数だから放物線である。そして今の実験ではさらに、「人は整数しか認識できない」と仮定してみる。この離散加減は典型的にデジタルであり言語だ。そのような可視化状況にあって、今の例の放物線はどのようにまたどこまで表現できるだろうか。

「原点は通ります」とか「(3, 3)は通ります」とかはきれいに言える。だがこの情報だけでは、受け手はその元の曲線をおよそ再現できない。それではと言うことでさらに、「(2, 1)の少し上を通ります」とか「(4, 5)の少し下を通ります」等の情報が追加されると次第におぼろげに見えてくる。でも「少し上」とか「少し下」と言われてもどの程度か分からないし、このようなとぎれとぎれの情報では永遠に完全再現は不可能だ。

そしてこのもどかしさがより一般に、「ありのまま」を言葉で説明するときのもどかしさである。離散的な言葉とその個々の言葉が占める領域は、もし2次元平面で例えを探せばおそらくボロノイ図に近いようなものになるであろう。だがこの単純化されたボロノイにも、これ以上の理論はない。ましてや言葉の分布とその陣取りなど、およそ表現不能の闇と霧のかなたにある。

このもどかしさが、冒頭に挙げた「モチーフ伝播に掛かる波動」についても言えるのだ。絵にかけない上に言葉は間接的過ぎるためだ。だから結局は「感じ取ってもらう」しかないが、それでもその本質はアナログの本領である波なのだ。もっと言えば、波とアナログはおそらく同義語だろう。

だから今の例を逆手に取るならば、もしアナログの空間において心象の軌跡を言葉に依らずに直接関数として追うことができれば、つまりアナログ世界にも関数があってそれを軌跡として引き描ければ、それが最善ということになる。決して容易ではないが。

22、枕詞の情報

枕詞(まくらことば)とは、和歌における「決まり文句」である。決まり文句だから、それに続く言葉も決まっている。と言うことは、枕詞の陽な情報は「限りなく零」と言うことだ。こんな情報のない飾り言葉が、そもそも全体で31文字と少ない短歌の中で4, 5文字も潰していることになる。これは情報学的に見れば、愚かの極みではないか。

もっとも後世になってさらに俳句が成立して、こちらはなんと全部で17文字だ。さすがに枕詞の入る余地もないし、現に入っていない。代わりになってその「拘束的役割」を成すのは、季語である。季語はそもそも千個以上とたくさんあって大きく縛らない。その上に「直の意味の他に季節も表示する」から、こちらはある意味情報過多とも言える。

私のような素人が俳句や短歌をやると、「俳句は短すぎるし短歌は長すぎるし、本当は中所が良いのだけれどそうすると良い調子にならない、世の中はなかなか難しい」などと思う。だがその意味では枕詞の情報希少や季語の情報過多は、この問題をうまく緩衝しているようにも見える。

ところで枕詞は本当に、単なる不要なお飾りなのであろうか。刺身のつま程の価値もないのであろうか。これは欧米の歌曲のようにその役割が陽の情報伝達のみと言うこととなら、あるいはそうだろう。だが和歌が本当に伝えたいのは端的に言えば、金になるような物質的有用情報ではなくて「心のありか」である。

そして言葉と言う外的な即物の表現が基本な道具は、心のありかやましてや微妙な心のひだを描けるほどに、およそ器用ではない。そこでここに例えとか響きとか整えとか仄(ほの)めかしと言った技法が、必然的に必要になってくる。

枕詞も起源的には意味があった。例えば「たらちねの」は「母」に掛かる枕詞だが、元は「乳が垂れた」が語源である。「あかねさす」は日とか紫に掛かる枕詞だが、元は「茜射す」である。「しろたえの」は衣に掛かる枕詞だが、元は「白妙の」である。これらが次第に形式化していった、導入部分つまり印象的なぼかしとなっていく。

形式化と言うと気が抜けた単なる退化のように聞こえるが、枕詞は同時に修験道の呪(じゅ)のように響きが価値を持つようになっていった。例えば「うつせみの」とか「し

瞑想録(その20)

きしまの」とか「さねさし」とか、たとえ元の意味が分からなくても響きが何やら幽玄である。何事か起きそうだ。この幽玄さこそが枕詞の命なのである。

実際の短歌例を百人一首から引いてみよう。伊勢物語の主人公でもある在原業平（ありわらのなりひら）の歌である：

ちはやぶる 神代も聞かず 竜田川 からくれないに 水くるとは

この歌で「ちはやぶる」は神に掛かる枕詞である。響きだけで十分に堪能できると思うが参考に語源を記しておく、「千早ブ」が「勢いがすごい」という意味の古語でこの連体形である。そしてこの季語で雰囲気を出しておいてから「神代も聞かず」、これは「記紀神話の神の時代ですら聞いたことがないほどあり得ない」という意味であり響きである。

竜田川、これは京都近郊の生駒山系を流れる川で紅葉（もみじ）がことに有名な川だ。続いて「からくれないに」、これは「唐紅」で「鮮やかな赤色」という意味である。当時の唐の国は技術最先端国であった。だからその国で染められる赤も、ひときわ鮮やかだった。最後に「水くるとは」、これは「川面を絞り染めに埋め尽くしてしまうとはなあ！」という感嘆の言葉である。

全部合わせると、「この竜田川の真っ赤なモミジは奇跡なほどに美しい」という意味になる。「たったこれだけ言うのに神を持ち出ししかもそれにお飾りをつけるとはバカバカしいにも程がある、ストレートに言った方が字数を節約できるではないか」などと、無粋なことを言うことなかれ。

この歌には実は、さらに隠された意味がある。当時有名な粹人であった在原業平は、二条皇后をひそかに慕っていた。そして歌会で彼女だけに分かるように恋の気持ちを打ち明けたのが、この歌の真意である。「名所の竜田川がモミジで真っ赤に埋め尽くされるほどにあなたをお慕い申し上げます」、これがこの歌の本意である。

ここまで聞けばこの歌の情報価値も、グーンと上がるだろう。なお、枕詞が盛んに使われたのは平安時代の初期までで平安時代後期以降はあまり使われていないが、仄めかしの技法自体は引き続いた。平家物語にも平氏の公達（きんだち）と女御衆の相聞歌は多く出てくるが、ぼかしはあるものの枕詞はほとんど見えない。

では結局情報と言う現代的物差しからは、枕詞の情報価値は一体どれほどなのか。以前にも見たように情報価値には、①個人の側面と②平均的社会的側面がある。現

実的価値しか認めない人には、枕詞は字数の無駄以外の何物でもない。でも果たして多くの人がそう思うだろうか。

そう思う人も騙されたと思って、この枕詞の導引する心持ちに感情移入してみよう。そうすると枕詞にはほかの言葉には代えがたい、いわば「超言語的」価値を感じると思う。それは絵を見て美しいと思い、名曲を聴いて心が豊かになり、良い香りに触れて心が和むのと同じほど高いレベルなのだ。

だから枕詞の情報はその量について言う前に質の高さに感じ入って欲しい。併せて業平の隠喩的歌い上げの情報としての品の高さにも感じ入って欲しい。枕詞が情報学に与える教訓とは結局、「情報は量と言うよりしばしば質でありしかも間接的な価値にも目を向けるべきだ」と言うことではないだろうか。

23、江戸時代と日本人

江戸時代は鎖国の時代であったが、この鎖国のおかげで日本は「蒸し風呂」のようになり、特に文化面で爛熟した独特の江戸文化を作り上げた。

滝沢馬琴の「南総里見八犬伝」等の奇譚物、井原西鶴の「好色一代男」等の奇想物、上田秋成の「雨月物語」のような怪奇物、伊藤若冲や狩野派や土佐派に見られる諸絵画、浄瑠璃や歌舞伎等の演劇物・・・、それこそ枚挙にいとまがない。宮本武蔵の「五輪の書」や鍋島藩の「葉隠れ」のような武士道もこのころ完成した。

一種ガラパゴス化し隔絶された社会の中で、混じりけなく純粹に日本的な要素のみが、もはやこれ以上ない程に非常識に発達を遂げた。「退廃の中にも力強い」ような、世界に誇る一大文化を創造したのだ。この文化がその後の明治維新の開国において、特に世界に順応する際の懐の深さとして役立ったことは、余り強調されていない。江戸文化がまとめて世界無形文化遺産にふさわしい程だ。

この江戸時代のように隔絶された時代が、西洋にもあった。12世紀から14世紀にかけての、「中世暗黒時代」と言われた時代である。時代に進歩は全くなく、もちろん「進歩が常に善」とは限らないが、誰もが爺さんや曾爺さんと全く同じ判で押したような暮らしをしては死んでいった。

では同じような隔絶された時代にあって、江戸時代は爛熟し他方中世はなぜ無変化だったのだろうか。思うに、一番の違いは自由度だろう。江戸時代は身分制度とかは

あったものの庶民に至るまで自由で、何でも許されるおおらかな雰囲気があった。この自由こそが、爛熟文化の発酵主なのだ。

他方で暗黒時代を支配したのはキリスト教である。キリスト教は異端にうるさい宗教で、庶民も無意識に異端狩りに殺されないように縮まり込む。しかもこの縮こまりこそが善として奨励された。つまり爺さんと寸分たがわず同じことをするのが善で、それ以外は悪だったのだ。こんな時代に文化が爛熟どころか発達するはずがない。この時代に黒死病も流行ったが、治療のために科学が発達することもなかった。

このように総括すると次のような反論が出そうだ、「それだけ自由で機転の利く時代になぜ科学技術の発達もなかったのか」と。同じ時代に西洋ではレンズを使って宇宙や微生物を探求し、地球は丸いと知って大航海をし、電磁気を見つけて生活を豊かにし、内燃機関を発明して大動力を得た。自由な時代ならどうしてこのようなことができなかったのだろうか。

江戸時代には大した禁忌はなかったのに、なぜかそういう機運が盛り上がらなかったのだ。ここで発明は一般に、2つのプロセスに大別できる。①原理を思いつく天才と、②その原理を役立つ形にする数多くの秀才たちだ。ちなみに①の段階は単に面白いからやるだけで、役に立つなどと言うことは毛頭念頭にない。そして江戸時代は、このどちらが足りなかったのだろうか。

江戸時代にも隠れた天才は居た。西洋と多分似たことは思いついていて、祭りの出店の見世物くらいにはなっていただろう。だがそこまでだった。だから足りなかったのは、「変わった思い付きを金にする多くの秀才たち」の方である。

実際に和算家の関孝和は三角関数や微積分まで思いついていたものの、これを物作りに用いようという応用的な人物はついに現れなかった。治世側の藩は万年資金不足で新田開発や金鉱探索に必死だったのだが、祭り小屋の出し物と藩の財政再建を結び付ける、この間の連絡の発想がなかったのである。

キリスト教の西欧には石油(燃える水)を動力にしようと思いついて努力した一群が生まれて、なぜ江戸時代には出現しなかったのか。冒頭の「江戸爛熟論」とは話が逆ではないか。まあ一つにはキリスト教がカトリックからプロテスタント主流に変わって、宗教色がほとんどなくなったという点がある。

瞑想録(その20)

でもこれは西欧が多少ましになったと言うことであって、日本は依然として劣後したままである。仏教や神道がこの手の開明的な人物の発現を抑えるほどに、イデオロギーに凝り固まった無知な宗教だとは思えない。もしそうならば、爛熟すらなかっただろう。

もっともコロンブスやマゼランの世界一周だって、地球が丸いことは月食の時の月の欠け方等によってギリシャ時代から知られていたというから、実用化までに2千年近くかかっていることになる。だから一概には言えないものの、電磁気の発見から発電技術に至るまで、あるいは内燃機関の成立から機関車や蒸気船への応用に至るまで、これらはすぐである。

ここで考えられるのは次のような違いだ。両者の一番の違いは宗教ではなくて、「たわいもない思い付きも化かすと金になる」と言う「システム思考」の違いだったのではないか。約束の大事さは世界共通だが、これが東洋では有機的な義として、他方西洋では無機的な契約の形を取る。これは平家物語とベニスの商人を比べてみればわかる。

コロンブスの大洋航海もスペイン王家との間で、「金は援助するが発見物は王家に帰属する」という契約が成立したためである。英国のキャメロン前首相の高祖父が高橋是清から日露戦争の戦争債を引き受けたのも、別に義ではなくてデリバティブ的発想のビジネスであって、少ない可能性に高利で賭けて一攫千金を狙ったものであり、契約である。

「火薬を基に西欧人は鉄砲を作り東洋人は花火を作った」と、良く言われる。確かに日本人の高度な美意識は、賤しい商売よりも雅(みやび)の方に向かいやすい。これが高度の芸術は産んでも武器や動力は生み出せなかった側面であろう。結局「約束を契約と捉えるか義と捉えるか」が大きな違いであって、かつ20世紀までは時代が契約の方に有利に働いたと私は見る。

24、夢と解釈(その13)

<夢1>私はプログラマーだった。新言語を使って、2枚の絵からそれぞれ一部分を切り取ることにより、「パカパカ」(交代点滅)を作っていた。すると先輩がやってきて、「社報に乗せるから」と、私の作業風景を撮影していった。先輩が帰った後で床を見ると、ちびた鉛筆が落ちている。「捨てれば良いや」と思ったが、ごみ箱が無くなっている。そういえば洋服掛けもロッカーもない。一体どうなっているのだ。

瞑想録(その20)

<解釈1>「SEがブラック業界」と聞いていたので、私はそもそも志望しませんでした。出てきた先輩は見覚えがあって、たしかケチで有名な先輩でした。

<夢2>都心での仕事が終わって、私は下りの急行電車の待合所に居た。周りは烏合の衆たちだ。ところが乗り込んでみるとそれはバスで、しかも港の居酒屋や食堂巡りをする観光バスだった。港に着くとみんな歩いて、食堂回りを始める。いつの間にか気の合う少人数になっていた。しかも全員が、「今夜は徹夜で回ろうぜ」などと張り切っている。

<解釈2>最近奥田英朗さんの「港町食堂」を読んだので、それが印象に残っていたのでしょう。私は他人と群れるのは嫌いですが、漁港や居酒屋の雰囲気は好きです。

<夢3>「アフリカで難病が流行っている」とのことなので、調査に行った。原因はどうも、「アフリカ蛭」と呼ばれるミミズに噛まれることらしい。そこで私がひらめきで、醤油と砂糖とキッチンハイターを混ぜて傷口に塗布したところ患者が全快して、皆をびっくりさせた。さらにオロナイン軟膏を混ぜた薬で蛭を殺せることも分かり、アフリカの原住民に感謝された。

<解釈3>昨日上野公園で野口英世の銅像を見たので、これが印象に残ったのでしよう。

<夢4>私は地域のマラソン大会に、裏方として参加していた。録画担当だ。司会進行役の人が「それでは用意ドン！」と言うと、皆一斉に走り出した。実況はローカルTVで放映されている。ところが司会が、「画面が変化に乏しいので去年の画像を少し流そう」と言う。そこで昨年のVTRを流した。それが司会は何を勘違いしたのか、「あ！大きく順位が入れ替わりました」などと叫んでいる。さらに「もっと別のVTRはないのか」と促されたが、あとは観戦していた子供たちの笑顔とか連れてきた猫の動画くらいしかない。

<解説4>実は去年にも、マラソンの実況を撮影した夢を見たのですよね。今回の夢はそれの、「1年後の続編」と言う形になっていました。

<夢5>私は弁士だった。「どうして東京には区しかないのだ、東京市を作れ！」と壇上で叫んでいた。聴衆には「そうだそうだ」と言う者たちもいれば、「今の制度で何も不便はない」と言う者もいた。するとヤクザ風の男が壇上に上がってきて、「貴様の意見は統帥権違反だ」と言う。「あれ？」とか思って「今は戦後だろう」と返すと、「無礼者、天皇陛下の大権を何と心得る！」とさらに詰めよってくる。

<解釈5>私自身のポジションはプロ市民とは正反対で、むしろ夢の中のヤーさんに近いのですけれど、おかしいですね。

＜夢6＞飛行機で出張なので、車で空港に向かった。車の運転手はなぜか、フランス人のパイロットがやっている。また会社の仲間が数人同乗していた。「今日の飛行機は10人乗りのビーチクラフト機だ」と、そのパイロットが言う。さらにパイロットが、「俺なんか仕事はたまにで、いつもはスキー、テニス、ゴルフに明け暮れているのだ」とも言う。同僚が「いいな、俺なんかスキーなんて年に数えるほどだぜ」と言うので、私が「だったら毎日スキーやゴルフして、会社の籍を抹消になっても本望じゃないか」と返してやった。

＜解釈6＞アランドロンが引退するというニュースが、何気に気になっていたのではないでしょうか。

＜夢7＞私は専門学校の生徒だった。途中入学したので良く分からなかったが、授業はもっぱら受け答えの練習とか対面会話の練習とかだ。要するにその学校は、実質的には就活予備校なのだ。3月も経つと皆就職して去っていき、そのたびに「合格お祝い会」がある。皆さん全員が有名チェーンの店員とかに就職していく。そしてお祝い会の後なぜかさらにパーティがあって、乾き物とかで簡易な立食パーティをする。でもなぜ私がそこに居るのが、最後まで分からなかった。

＜解釈7＞今はちょうど就活の季節で、電車等で就活のお姉さんたちを良く見ます。そのせいですかね。私はあんなことは、2度とやりたくないですが。

＜夢8＞私は演劇部の部員だった。別の女部員が舞台用の豪華な衣装を売り払おうとしていたので、「それは部の資産であってあなたのものではない」と注意したが、なおも辞めなかった。そこで証拠の写真を撮って、教務課に報告した。そして戻ってみるとその女性がその衣装を、今度はホームレスに呉れようとしている。辞めさせようともみあいになっているうちに、その衣装はどこかに消えてしまった。

＜解釈8＞全く見当が付きません。私はそんな正義漢ではありません。むしろ面倒に巻き込まれるのは避ける「事なかれ主義者」です。

＜夢9＞トイレでウ○チをした後で「あれ何だか変だな」と思ったら、パンツをはいていたまま自分の部屋で布団に寝ていた。その少し後で今度は利根大橋を渡っていたら、急に土砂降りになって水位が上がり、流れが橋の上までかかってきて「助けて！」と叫んだ。だが良く見まわしてみると、再度布団の中だった。

＜解釈9＞そろそろぼけ老人にならないか、内心恐れているということでしょう。

2017. 06. 26